

山口県博物館協会

# 会報

第28号

2004年 1月



**特集** 博物館ボランティアの  
取組みと課題

～開かれた博物館をめざして～



表紙写真<瑠璃光寺五重塔>

日本三名塔の一つで、国宝に指定されている。もともと、この地（山口市香山町）にあった香積寺の塔で、大内氏第26代盛見が、兄の義弘（25代）の菩提を弔うために、嘉吉2年（1442）に建てたと伝えられている。瑠璃光寺は山口市仁保にあったものを、元禄3年（1690）、現在地に移築された。

檜皮葺き総ヒノキ造りで、塔高31.2mあり、大内文化最高の傑作と言われ、山口市のシンボルである。近くに「瑠璃光寺資料館」があり、五重塔関連の資料及び寺宝等が展示してある。

## 巻 頭 言

- 一つの学びの原点・・ 1  
山口県立山口博物館 松尾勝美

## 調 査 報 告

- 博物館ボランティア導入状況と山口県博物館協会の取組み・・・・・・・・ 3  
山口県立山口博物館 宗清禮吉

## 博物館ボランティアシンポジウム講演記録

- 博物館ボランティア活動の意義と留意点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9  
国立科学博物館 石川昇

## 博物館ボランティアシンポジウム パネルディスカッション記録

- 博物館ボランティアの取組みと課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

## 実 践 記 録

- ボランティア集団「田布施町郷土館友の会」の歩み・・・・・・・・・・・・・・ 31  
田布施町郷土館 林英美夫

### 自主的な活動をめざして

- ～山口県立美術館ボランティアの活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33  
山口県立美術館 前田淳子

### 20年目を迎えるボランティア活動

- ～下関市立美術館友の会の取組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35  
下関市立美術館 岡本正康

### 「あくあは一つ」の活動について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

- 下関市立しものせき水族館 海響館 水嶋健司

- 博物館ボランティアのすすめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39  
萩市郷土博物館 大嶋恵

## 新加盟館紹介

- 防府市地域交流センター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40

- 鑄銭司郷土館・・ 41

## 報 告

- 「前田茶臼山遺跡」発掘調査報告書の刊行・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42  
山口県文化財保護課 石井龍彦

## 案 内

- 「第21回国民文化祭・やまぐち2006」の開催に向けて・・・・・・・・ 43  
山口県文化振興課国民文化祭準備室

### 会報28号の内容について

文化庁から委嘱された博物館ボランティア推進のための事業を特集記事としました。  
(事業の詳細は「調査報告」3ページ及び21ページの囲み記事をご覧ください。)  
また、従来からありました「館園だより」は、ボランティア活動に熱心に取り組んでいる館の「実践記録」に代えさせていただきます。

一つの学びの原点

山口県立山口博物館

館長 松尾 勝美

「日本人とは何か」、「日本人のルーツを探る」と言った文化論が、様々な角度からアプローチされ、ある種のブームのように今までに何度も起こった。日本人はこの種の文化論が好きなようである。私も少なからず興味を持っている。

かつて、横浜国大の宮脇昭先生から、西日本の森林植生はシイ、タブ、カシの三つを覚えておけばよい。自然破壊された国土を元にもどすには、その土地の植生にあったものを植えなければだめだということを知った。当時（昭和58年頃）は環境論、エコロジーということがはやりであった。

その後、「照葉樹林文化」（中公新書）という日本文化の深層というか基層文化論に出会った。照葉樹林文化は大阪府立大学の中尾佐助先生の「栽培植物と農耕の起源」に端を発し、幾人もの学者の共同研究で成りたっている。最近では、国立民俗学博物館長であった佐々木高明先生が、「日本文化の多重構造」というかなり精緻な日本文化論を提起されている。

ネパール・ヒマラヤ山地の中部を歩くと西日本によく似た常緑のカシ類を主とした森林が存在し、そこからの森林は、ブータン、アッサム、東南アジアの北部山地をへて、雲南高地へと伸び、さらに長江の南側の山地から朝鮮半島南部と西日本に至る東アジアの暖温帯に広がっているとのことである。この森林を構成する樹種は、カシやシイ、マテバシイ、タブ、クス、ツバキの仲間などを主としたものである。いずれも常緑で、樹葉の表面がツバキの葉のように光っているので「照葉樹」とよばれるものである。

この照葉樹林帯には、過去から現在に至るまで数多くの民族が居住し、その生活文化の中には、民族の差異があるにもかかわらず数多くの共通の文化要素が存在する。照葉樹林帯に共通する文化要素としては、次のようなものがあるというのである。

ワラビ、クズ、ヒガンバナなどのイモ類やドングリなどの堅果類を水にさらしてアク抜きをする技法、茶の葉を加工して飲用する慣行、蚕を始め幾種類かの絹糸虫の繭を採取し糸を引いて絹をつくる技術、ウルシノキやその近縁種の樹液を用いて漆器をつくる方法、柑橘類・シソ・エゴマの栽培とその利用、麴を用いて酒を醸造する、などなどである。

そのほか、雑穀や稲の中からモチ種をいう品種をつくり出して、モチやチマキ、オコワなどの食品をつくり、それを儀礼食として用いる。ミソやナットウとよく似た大豆の発酵食品をつくる慣行やナレズシやコンニャクなどの特殊な食品をつくる食習慣なども照葉樹林帯の各地に広く伝承されているとのことである。

以上のような共通の文化要素によって特色づけられる文化を「照葉樹林文化」と名付けら

れたのは、中尾佐助先生である（「日本文化の多種構造」）。

日本民俗学の父といわれる柳田国男先生は、日本文化は稲作文化から始まったと言っておられる。私は前々からこの説に疑問をいただいていた。

稲作は弥生時代からが定説で、少なくとも紀元前後 300 年間（最近はさかのぼるといふ説がある）ではないか、約 1 万年の縄文時代の日本人はどうしていたのか。この長い期間の生活文化は現日本人のどこかに文化 DNA として残っていないのか。こうした疑問を抱いている時に照葉樹林文化論に出会ったのである。

私はある年から毎年友人と 2泊3日の旅に出ている。縄文の文化 DNA の痕跡を求めて、私なりの日本の農村文化、森林文化を探る旅である。こう言えばカッコいいが、本音のところは各地の温泉を訪ねるのを楽しみにしているのである。最初は、今でも焼畑農業がやられている宮崎県椎葉村に行くことにした。初めて現地で焼畑というのを見た。この椎葉村についてはほとんど前知識がなかったが、当地に行ってびっくりしたことがある。そこには「民俗学発祥之地」という碑があるではないか。奇しくも、私は柳田国男先生の民俗学の原点を最初の旅の目的地に選んでいたのである。

それから岐阜県白川郷・白山の旅、奈良県十津川村から熊野の旅、しまなみ街道から佐田岬をフェリーで渡る九州の旅、福井県の小浜からの若狭、鯖街道の旅と続けてきた。

私の文化探訪と温泉めぐりの旅は、正に遊びである。しかも短期間にかげ足で通り過ぎるものである。それでも各地を歩く度に日本は広いと実感する。この日本の至るところに人が住んでいる。また営々と森林を伐採し、原野を焼き、田畑をつくり、定住し、文化を築き、支えて来たかと思うとため息が出る。各地の食べ物を食し、産物を見るたびに日本文化も一様でないと感じる。

竹細工の竹材であるとか、編み方であるとか、うるし工芸品、木工品、紙細工など材質や形状と言ったものまで含めると多種多様である。また、かつて日本の各地の農山村に住みついていたはずの木地師や漆掻き職人などの系譜はどうなったのであろう。本県でも誰かが研究しているにちがいないと思いながら、勉強不足のためいまだに知らずにいる。

私の文化探訪と温泉めぐりの旅は、あまりにも時間的余裕がない。行って見たいところが山ほどある。東北地方にも足を伸ばしたいのだが実現していない。東北地方にはいい温泉もある。体力の続くかぎり各地の農村文化、森林文化をゆっくり見たいのものである。

新たな発見があるにちがいない。NHK のプロジェクト X のテーマ音楽ではないが、私の旅は、まだ終わらない。

## 博物館ボランティア導入状況と山口県博物館協会の取組み

山口県立山口博物館  
副館長 宗 清 禮 吉  
(山口県博物館協会事務局)

### 1 はじめに

現在わが国の多くの博物館は大変厳しい状況に置かれている。長引く不況や博物館の施設増加などにより、館当たりの入館者の減少が続いている。公立館にあっては地方公共団体の厳しい財政事情のため、予算が大幅に削減され、企画展規模縮小や職員削減等が進行しつつある。その一方で、博物館等の施設の生涯学習への活用の声はますます高まっている。博物館は各地域の貴重な文化財、資料等の宝庫であるので、保存・保管に取り組みながら、生涯学習に役立てるために開放度を高めることが今後の博物館に課せられた重要な課題である。

開かれた博物館とはどのような状態であろうか。一言で表現すれば、資料収集、保存、調査研究、教育普及（展示、講座等）、広報等、博物館の様々な活動において、外部委員、一般県民等の意見を反映しながら、柔軟な対応が可能な博物館であると考えられる。

開放度を更に高めるには、ボランティアの導入が効果的である。ボランティアの方といっしょに活動することで、博物館が県民に一層親しまれる身近な存在となる。また、ボランティアの方の知識、技能等が活かされ、優れた改善意見が得られるとともに、博物館の活動が生き生きしたものとなる。博物館にボランティアを導入する主目的は、①館の活性化を図るため、②開かれた博物館づくりの推進、③生涯学習の場の提供などである（大堀 1998）。このように、県民のための開かれた博物館をつくるために、ボランティアの活用は避けて通れない課題である。

今回、山口県内の博物館におけるボランティア導入状況を調査し、導入に係る課題を明らかにするとともに、解決の道を探るため、山口県博物館協会加入館 71 館を対象に詳細なアンケート調査を行った（回答率 90%）。次にその結果について報告する。

なお、本事業は、文化庁の平成 15 年度「博物館ボランティア推進モデル事業」の委嘱を受けたもので、内容は、①ボランティア導入状況のアンケート調査、②博物館ボランティアシンポジウムの開催、③博物館協会ホームページの活用、④博物館協会会報へのボランティア特集の掲載、⑤コーディネーターの研修事業実施等からなる。本事業で実践した内容は会報 28 号（本号）に掲載するので、今後各館が取り組む際の参考にしていきたい。

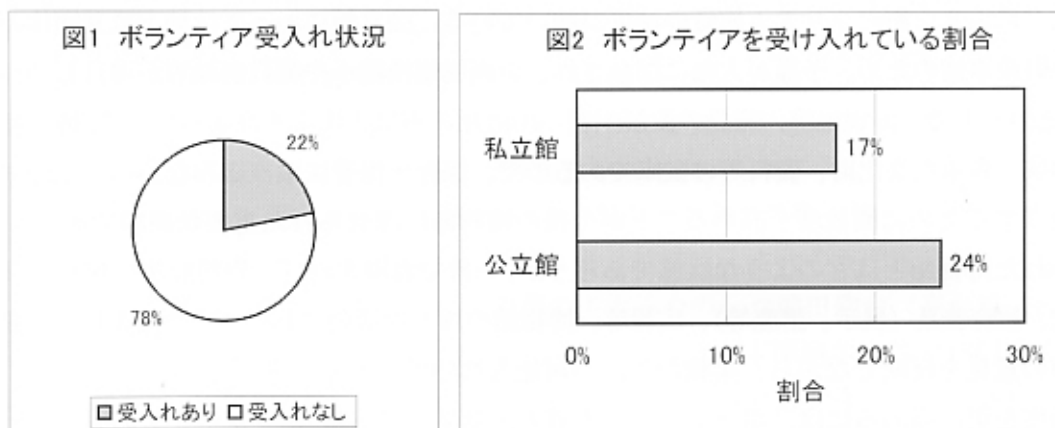
### 2 ボランティア導入に関するアンケート結果

現在山口県博物館協会加入館は 71 館であり、内訳は公立館 45 館、私立館 26 館である。また、博物館法で分けると、登録博物館 16 館、博物館相当施設 4 館、その他博物館類似施設等 51 館となっている。県内 71 館を対象に、平成 15 年 10 月にボランティアの取組みに関するアンケート調査を依頼し、10 月末締切りで回収を行った。その結果、公立館 41 館（91%）、

私立館 23 館（88%）から回答が得られ、全体の回収率は 90%であった。

### (1) ボランティア受入れ状況

図 1 に示すように、ボランティアを受け入れている館は回答館全体の 22%である。館数で言えば、公立館 10 館（公立回答館の 24%）、私立館 4 館（私立回答館の 17%）であり、公立館の導入率が私立館に比べてやや高い（図 2）。なお、ボランティアの受入れを館の制度・事業として組織的に行っている館は全受入れ館の 58%であった。



全国的な調査は、文部科学省が 3 年ごとに実施しており、社会教育調査報告書でまとめている。1999 年の調査（文部科学省 2001）では全体で 13%、2002 年の調査（文部科学省 2003）では 15.9%と、増加傾向にある。本県の導入率は 22%で、全国に比べ低くはない。特に「登録博物館＋博物館相当施設」について比較すると、2002 年の全国平均 27.8%に比べ、本県は 44.4%で、かなり進んでいると言えよう。

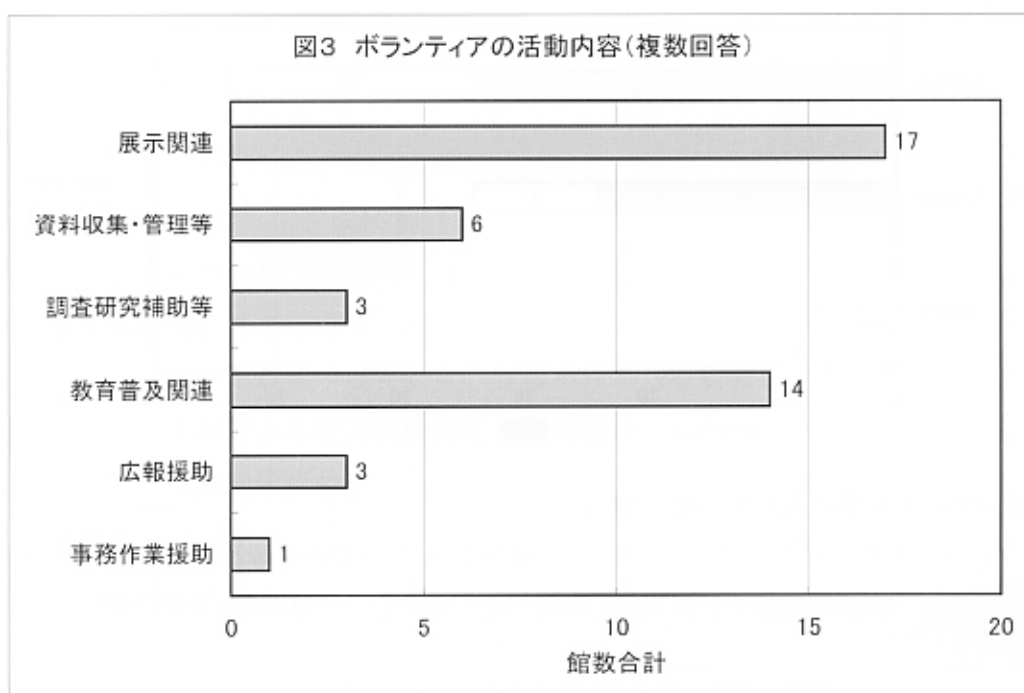
本県の 1 館当たりのボランティア平均人数は、私立館 7 人に対して、公立館 43 人で、大きな開きがあった。因みにボランティアを受け入れている館の正規職員数は、私立館 2.0 人に対し公立館 9.9 人で、ボランティアの人数そのものも、館の規模と関係が深い。ボランティアを受け入れている私立館 4 館の設置者別内訳は、宗教法人 3 館、財団法人 1 館（もと仏閣経営）であり、私立館の場合、神社仏閣の奉仕団体に基づく活動であることが考えられる。

その他の調査をまとめる。活動頻度は、毎週 3 館、毎月 2 館、不定期 8 館であった。男女比は「男性が多い」6 館、「ほぼ同数」4 館、「女性が多い」3 館であった。構成年代は、回答した 12 館中 8 館において 60 代が第 1 位、続いて多いのは 50 代、70 代であった。職業は、私立館ではトップはすべて無職の方、公立館のトップは主婦、学生、無職の方など館によってまちまちであった。また、「ボランティア活動が大いに役立っている」8 館、「事業内容によっては役立つ」4 館、「役立たない」と答えた館は無かった。

### (2) 受け入れている館のボランティア活動内容

図 3 に示すように、「展示関連」17 館（展示解説 9 館、展示監視 3 館、展示資料制作支援 3 館、会場整理 2 館）、「教育普及関連」14 館（講座運営補助 4 館、野外活動の指導・補助 4 館、講座の講師 3 館、講座に使用する教材教具製作 3 館）が抜きん出ている。「その他」の

内容として興味を惹くのが、私立館における館内清掃（1館）、庭園手入れ（2館）である。



### (3) 謝礼の支払い・保険等について

謝礼については、回答した10館のうち、「払わない」6館、「事業内容によって支払う」3館、「すべてのボランティアに図書券で支払う」のが1館あった。

交通費は、「払わない」8館、「一部支払う」1館、「全額支払う」が1館であった。

ボランティア保険は、「かけていない」7館、「全員にかけている」2館、「一部かけている」が1館であった。

### (4) 研修実施状況

「全員に頻繁に行う」3館、「業務内容によっては行う」5館、「行わない」3館であった。また、「最初だけ行う」館が1館あった。

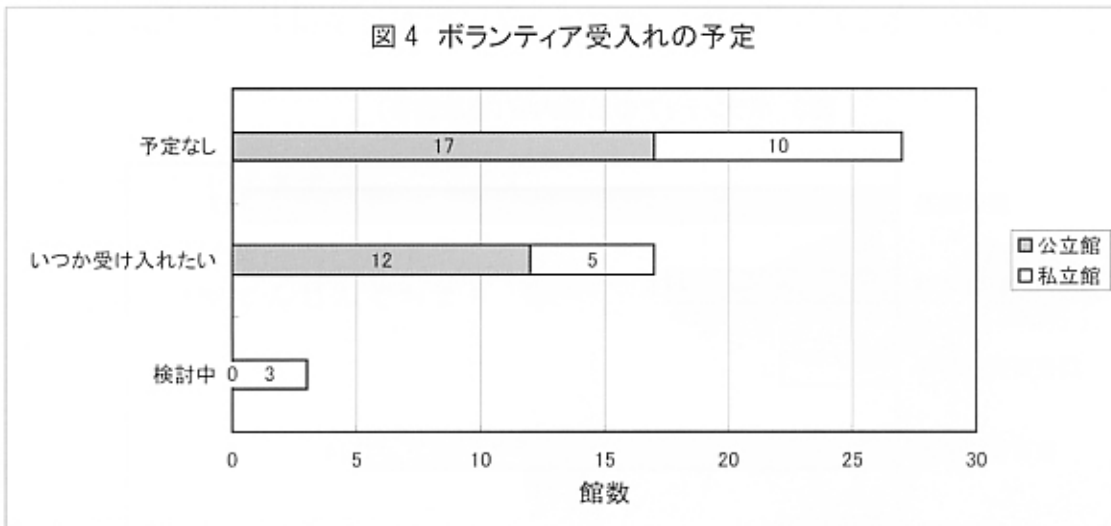
### (5) ボランティア対応の係

「係があるが他との併任」5館、「係をつくり専任職員配置」1館、「特別の係がない館」が6館であった。

## 3 ボランティアを受け入れていない館について

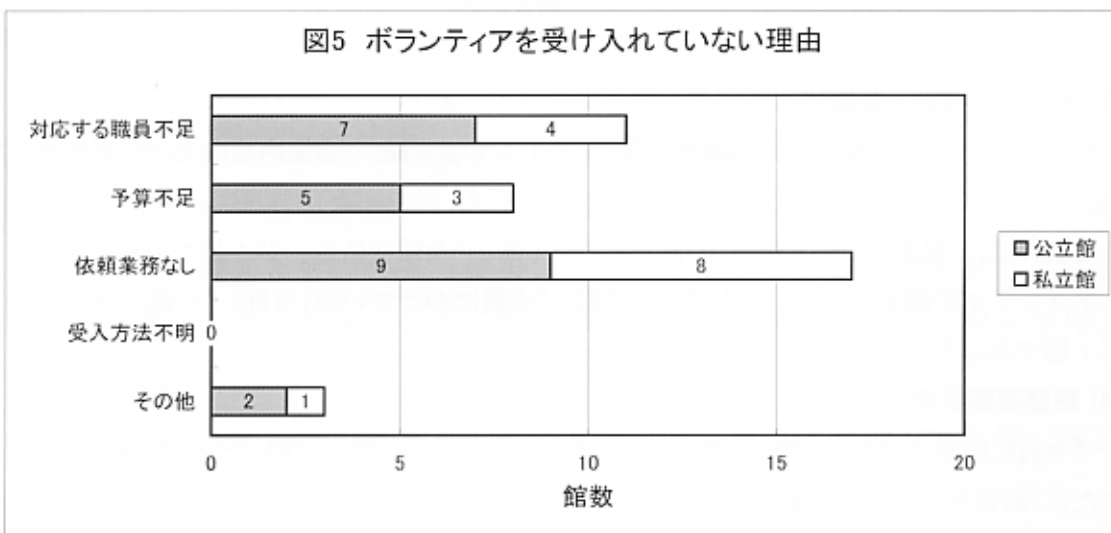
### (1) 今後の受入れ予定

ボランティアを受け入れていない館について、今後の予定を尋ねた結果が次ページの図4である。「受入れ検討中」のものと「いつか受け入れたい」を合わせると20館(43%)であり、「予定なし」が27館(57%)である。



### (2) ボランティアを受け入れていない理由

現在ボランティアを受け入れていない館が50館あるが、その理由を尋ねたものが図5である（複数回答）。「依頼業務なし」17館、「職員不足」11館、「予算不足」8館と続く。



### (3) ボランティア希望者がある場合の対応

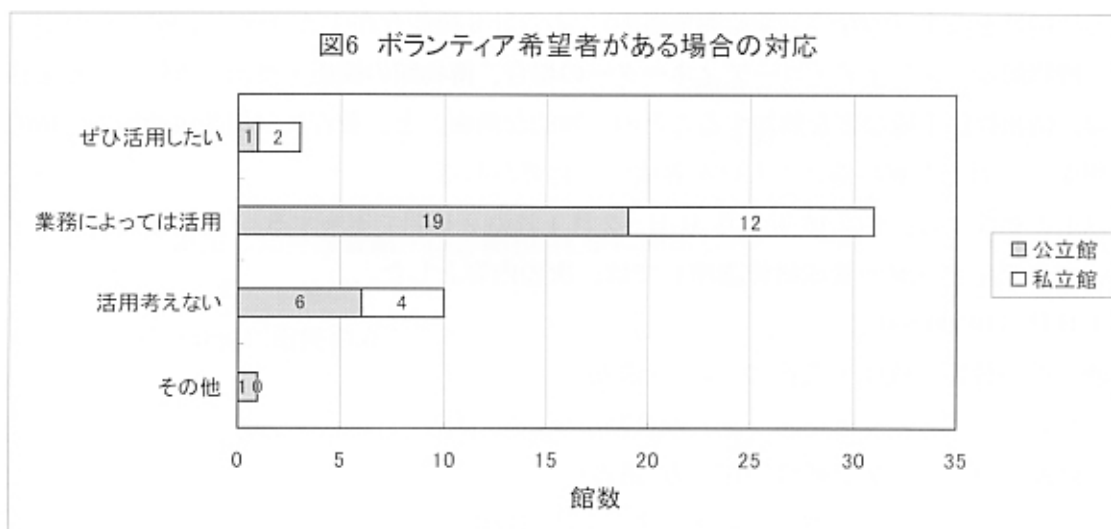
次ページの図6は、現在ボランティアを受け入れていない館において、「もし希望者が現れた場合どうするか」という問いに対する回答である。「業務によっては活用する」館が31館（69%）でトップであり、「活用を全く考えない」館が10館（22%）あった。

## 4 博物館ボランティア活動を充実させるための取組み

### (1) ボランティア養成研修の必要性

博物館におけるボランティア活動が効果的に行われるためには、研修を実施することが重





要である（鷹野 1999、大堀 1999）。ボランティア志願者の年齢、履歴、特技、才能、知識量、性格、活動可能な日程等非常に多様である。一方、博物館も資料の収集、保存、調査研究、教育普及の各活動とそれらを支える事務部門の職員・財産管理、予算執行、広報等多くの業務を抱えているので、博物館の業務のどこをどのような目的でボランティアの方の活動に組み入れて双方が充実した活動を行っていくか、様々な課題が存在する。

このため、ボランティアとして携わる各業務に関する技量向上のための研修が不可欠である。しかも、単に技量の向上の研修に止まるだけでなく、グループ同士の人間関係を円滑に保つための方法等に至るまで幅広い研修が望まれる。ただし、これはあくまで各館で独自に実施するか、あるいは同種の館において連携を取りながら実施すべきものである。なぜならば、一言で博物館といっても、総合博物館、美術館、歴史博物館、動物園、植物園、水族館、民俗資料館等を含み、互いに業務内容が異なっており、共通の研修内容の編成が困難な場合が多い。

## (2) 博物館協会としての研修の取組み

個々の館におけるボランティア養成研修はそれぞれの館において実施すべきことは先に述べた。では各館に必要なコーディネーター（調整者）をどこが養成すべきであろうか。ボランティア・コーディネーターの役割は、活動の場の開拓、情報収集・提供、関係機関との連絡調整、参加者に対する活動の動機付け等である（大堀 1999、文部科学省 2003）。小規模館では1名程度でもよいが、中規模以上だと館側、ボランティア側等に複数名配置すれば、充実した活動が促進されるであろう。

コーディネーターの養成は、その役割の多様かつ複雑なことから、個々の館で行うのは困難である。その養成こそ、博物館の連絡・調整機関である博物館協会が行う必要があると考える。

## (3) コーディネーター養成研修の内容

ボランティア・コーディネーターの機能として、「知らせる（情報提供機能）」、「育てる（養成・教育機能）」、「支える（相談援助機能）」、「調べる（調査・研究機能）」の4機能の他、そ

これらの根幹をなす「つなぐ（需給調整機能）」の合計5機能存在する（巡 1996）。したがって、博物館ボランティア・コーディネーターの場合、博物館の機能・役割、依頼される業務内容、情報提供手段などを熟知することの「知的な側面」と、教育及び相談援助等の「情的な側面」の両方を兼ね備えた人材を養成する必要がある。

以上の要件から、平成16年1月31日～2月1日の2日間で実施する、「博物館ボランティア・コーディネーター養成研修講座」では、次の内容とした。

#### 第1日目（10:00～16:20）

- 博物館の種類・機能・業務について（講義）
- ボランティア・コーディネーターの役割について（講義）
- 博物館ボランティアと研修の在り方（講義）
- コミュニケーション演習（インターネット活用技術）

#### 第2日目（10:00～16:00）

- リーダーシップについて（講義）
- 博物館ボランティアの取組みに関する事例発表・研究協議
- ボランティアのためのカウンセリング技術（講義）、エンカウンター・グループ演習

## 5 おわりに

社会教育施設、特に博物館へのボランティア導入は、人手不足の解消が主目的であってはならない。そうでなく、ともすれば閉鎖的になりがちな施設において、ボランティアの方の意見を取り入れながら開かれた博物館を、共同して創っていくことが大切である。結果として入館者が増加するなど、館の活性化につながる。今回実施したボランティア導入に関するアンケートは、各館の現状及び課題が把握できるので、今後のボランティア活動推進に寄与するものと期待する。また、県内の博物館の連絡・調整役をこなす博物館協会が、ボランティア・コーディネーター養成研修を開催することで、本県の博物館ボランティアの活動が充実していくものと確信している。最後に、今回のアンケート依頼に対して、多忙にもかかわらず回答して下さった博物館協会加入各館に対して、深く感謝する。

## 参考文献

- 巡 静一（1996）：実践ボランティア・コーディネーター（中央法規出版）。
- 鷹野光行（1999）：博物館経営論（雄山閣出版）。
- 大堀 哲（1999）：生涯学習と博物館活動（雄山閣出版）。
- 文部科学省（2001）：社会教育調査報告書 平成11年度（文部科学省編刊）。
- 神奈川県博物館協会（2003）：神奈川県博物館協会会報第74号（神奈川県博物館協会）。
- 文部科学省（2003）：社会教育調査中間報告 平成14年度（文部科学省編）。
- 文部科学省（2003）：地域におけるボランティア活動活性化のための調査研究報告書（株式会社日本総合研究所）。

## 博物館ボランティア活動の意義と留意点

国立科学博物館

学習支援課長 石川 昇

私の話はこれから博物館でボランティアをしてみようかなという方が、博物館ボランティアの現状や趣旨を把握したうえで、意欲と期待を持ってボランティア活動に取り組んでいただくようになってほしいということを第一の目的として話したいと思います。

### 1 博物館におけるボランティア活動の概要と導入の背景

#### (1) 博物館におけるボランティア制度の導入と概要

これから話す「博物館」は博物館法で規定されている「博物館」という意味です。すなわち、博物館法における博物館とは、それぞれの博物館のテーマで、歴史とか美術とかのそれぞれのモノを調査・研究、収集、保管して、市民・県民のために展示したり教育普及活動を行う機関であって、「博物館」の名前がついてなくても博物館です。ですから美術館でも動物園でも植物園でも科学博物館でも歴史博物館でも博物館です。ある県では「美術博物館」という名称を使っているところもあります。そういうことを念頭においてお聞きいただきたいと思います。

まず、現在どのくらい博物館にボランティアが導入されているかということをお知らせします。博物館といっても、登録博物館であるとか、博物館相当施設とか、博物館類似施設とかあるのですが、ひっくるめて博物館全体で言います。3年ごとに文部科学省が出している冊子で『社会教育調査』という冊子がありますが、それによれば、平成11年度では5,109館あるうちボランティア制度を導入しているのは688館で13.5%です。平成14年度はまだ本が出ていませんが、インターネットで調査の内容を見ることができます。5,360館のうち、854館で、15.9%になり着実に増えています。増え方は、ここ数年けっこうスピードが上がっているかなという印象を持っています。

それから、いつからボランティア制度が導入されているかということ、日本博物館協会の調査では昭和30年代からだそうです。公けに市民・県民に募集して始めたのは、昭和49年（1974年）の北九州市立美術館というふうに言われています。北九州市立美術館が開館するときに、初代館長さんがアメリカへ視察に行かれて、そこで美術館のボランティア活動

---

\* 平成15年11月1日に開催された「博物館ボランティアシンポジウム」の講演記録です。シンポジウムの詳細は21ページの囲み記事をご覧ください。

を見て、これから開館する美術館で展示解説の活動を行うボランティア制度を考えられ、導入されたのだそうです。数年前に見学に行きましたら、ボランティアの方は展示室前の廊下にテーブルを出して、案内、情報提供をやっておられましたし、一定の時間に集まってガイドツアーもされていました。私はそれに参加し、とても楽しかったです。また、大変おどろいたのは展示の解説シートのことです。学芸員が書いているのは当然なのですが、ボランティア誰誰というボランティアの名前が書かれた、つまりボランティアが解説したシートもあったのでおどろきました。



山口県立美術館の前田さんはかつては北九州市立美術館でボランティア担当もされていたので詳しいでしょう。そういう美術館における展示・解説ボランティアが全国各地に波及していきました。北海道立、三重県立、静岡県立、岡山県立などの各美術館、徳川美術館とかいろいろな美術館に波及していきました。

博物館におけるボランティア活動のそもそもの始まりは、展示とお客さんや見学者を、案内、解説、ガイドツアーなどでつなげる、結びつける活動であったし、今でもそれが中心です。でも、その後、活動分野が広がっていきました。

たとえば、国立科学博物館では昭和61年に「たんけん館」という子ども向けの参加体験型の展示施設で子どもに体験の仕方を教える活動を始めました。いろいろな展示があって、スイッチを押したりハンドルを回すと装置が動いてその場で実験を体験することができる、あるいは、森の展示の中に入って、動物の剥製や樹木に自由に触れることができる。そこでボランティアの方が「これやってみよう、こういうふうにするんだよ」「どうしてこうなるんだろうね」など、自然や科学について興味・関心を引き出すような助言をしてあげる、そういう活動を始めました。それは、自分自身の学習成果、蓄積した知識を活動に生かすことになり、やりがいのある活動でもあり、さらにボランティア同士が仲間になって楽しいということもあって、今まで16、7年も続いて来ました。

また、昭和62年に北海道開拓の村もボランティア制度を導入しました。開拓の村は村内にいろいろな建物、例えば役所、旅館、漁師や農家の家などがあり、そのような展示の案内、解説をやったのですが、そのほかにプラスして「演示」、演じて示すと書きますが、ボランティア自身が昔の制服を着て交番や警官についての解説をしました。これはお客様にとっても受けたようです。おもしろい、まるで生きて動く展示であるわけで、いっしょに並んで写真を撮ってくれということもあつたりして、ボランティアの方にとってもやりがい

があって喜ばれました。

## (2) 博物館における特色あるボランティア活動

こうして、博物館におけるボランティア活動は展示と見学者を結びつける活動の中心でありますけれども、いろいろな活動が可能なのだなということが分かって、それぞれの博物館でいろいろな活動を開発されてきました。

たとえば、国立科学博物館は東京都の上野にありますけれども、そこから近いところに、葛飾区があり、そこに葛飾区郷土と天文の博物館があります。そこには天文ボランティアと考古学ボランティアという2種類のボランティア制度があります。天文ボランティアとは夜に天体観望のお手伝いをするのです。考古学ボランティアというのは全国の博物館で多分ここだけと思うのですが、埋蔵文化財の発掘調査をボランティア活動でやるというものです。研修をしっかり積んでやるというものの、貴重な文化財に関する仕事をボランティアにやってもらうというのはよくぞ踏み込んだものだと思います。

神奈川県立生命の星・地球博物館ではボランティアが標本整理、調査などもされています。

また、江戸東京博物館ではガイドツアーをやっています。これはいろいろな博物館でやっていることで珍しいことではありませんが、日本語だけでなく何種類もの外国語のガイドツアーをやっています。英語、フランス語、スペイン語など、大したものだと思います。

北海道立近代美術館に行きましたら、ガイドツアーや展示解説をやっていました。1階の奥には資料コーナーがあって本やビデオなどを見せてもらえますが、ここにもボランティアの方がいらっちゃって、受付やビデオ貸出などをされていました。そして、ミュージアムショップもボランティアの方がやっているのを見に行きました。私どもの科学博物館ではミュージアムショップの仕事をボランティアの方にお問い合わせすることなど考えも及びません。お金をもらったって大変だということです。たとえば、遠足・修学旅行シーズンには、子どもたちは団体でワァーと来てすごい喧騒になります。「オバチャン、早くしてよ、クジラの前に2時集合なんだよ」とか言われて必死にレジをやる。団体が一段落すると、あっちのものがこっちに来たり、ときによっては本の帯を切られたりなど、とても「ボランティアとしてやりがいがありますよ」などと言ってお問い合わせすることなど考えられないと思いながら、見に行きました。すると、私どもの博物館とは別世界でした。ミュージアムショップも美術館の延長でした。すてきな音楽が流れていて、売っているポスターにしても便箋にしてもそれ自体が美術品のようなものです。そこではモノを売り買いしながら美術や美術館についての話もできるのだな、と思ったのでした。そして、私は、このフクロウのネクタイピンを、私どもの博物館でもマスコットがフクロウですから、これいいな、私どもの博物館でも売ればいいなと思いながら見ていたら、ボランティアの方が、「これはね、地元の彫金作家が一つずついいいに作っているんですよ。よく見てください。ほら、顔の表情が違うでしょう、どれが好きですか」と聞かれて、「これいいですね」と言ったら買うことになっちゃった、ということで、ここにあります。でも、とても気に入っています。

ほんとにいろいろな活動が行われるようになりました。私の後で、山口県内の博物館のボランティア活動の状況が開けると思いますが、いずれにしても博物館とボランティアが協力して、博物館にとっても、お客にとっても有意義な、そしてやりがいのある活動を開発していくことが大切で、これしかだめだというのはないと思います。

### (3) 博物館ボランティア導入の背景

かつて多くの博物館は昭和40年代、50年代において、ところによってはまだそういうところがありますけれども、人をあまり寄せつけない、一般の人、あるいは少なくとも子どもたちを寄せつけないような雰囲気がありました。博物館の展示は学芸員の調査・研究、収集活動の成果の発表の場である、だから、解説も専門用語を使う、だから難しい。来たい人が来ればよい、分かる人が分かればよい、という雰囲気を持っていたのではないのでしょうか。それは博物館のみならず、私が利用した昭和40年代の図書館もそうでした。もしかしたらいろいろな社会教育施設の多くがそうだったのかもしれませんが。どうぞいらっしやい、ようこそいらっしやいましたという雰囲気ではなかったような気がします。

それは博物館活動の主体は博物館員の方であって、県民・市民を意識したものでなく、博物館側の論理で運用されていたということではないのでしょうか。日本のみならず、世界的にそういう傾向があったようです。1964年にユネスコが博物館の開放に関する勧告というのを出して、博物館は入館料を取るべきではない、開館時間を利用しやすいように改めるべきだ、博物館を一部の人だけでなく一般の人々が利用しやすいようにするべきだ、などという勧告を出したのですが、変わらなかったのです。それがなぜ、ここ2、30年のうちに変わってきたかということ、生涯学習という考え方の広がりが高まりが背景にあると私は考えています。

生涯学習というのは、中央教育審議会が昭和56年に出した「生涯教育について」という答申によれば、こんなふう書いてあります。「今日、変化の激しい社会にあって、人々は、自己の充実・啓発や生活の向上のため、適切かつ豊かな学習の機会を求めている。これらの学習は、各人が自発的意思に基づいて行うことを基本とするものであり、必要に応じ、自己に適した手段・方法は、これを自ら選んで、生涯を通じて行うものである。この意味では、これを生涯学習と呼ぶのがふさわしい」。「生涯」「学習」ということで、生涯ずっと学習し続けなければならないのかと思うとウンザリしてしまいますが、そのときそのときに、より充実した人生を生きるために自分に適した学習を行う、という考え方なのではないのでしょうか。そして、個人個人がそういうことが可能な社会の基盤をつくることを理念とする、いわば生涯学習社会をつくるのだということを目指したのでしょうか。

こういう考え方が広まって、博物館、図書館など社会教育施設は生涯学習施設として期待されるようになりました。そして、変化していきました。解説は専門用語を使って難しく書いてあるだけでは生涯学習の場としてはふさわしくない、そういう部分はあってもいいが、分かりやすく興味を引くように書くべきだ。できれば子どもにも分かるようにしたい。私も

老眼になっていますが、小さい字で書いてあると高齢者は読みにくい。いろいろなバリアをできるだけなくして、ウェルカム、どうぞお出てください、どうぞ学習してください、あるいは楽しんでください、多くの博物館はそういうふうになりました。学芸員の調査研究は博物館ですからやるべき大切な事柄ですが、それとともに市民の学習とか市民の利用とかも重要なものだということに軸足を移していったと言えるのではないのでしょうか。地域の住民のニーズに合致した、人々が繰り返し利用する博物館をめざすようになりました。そして、さらに住民に学習してもらうだけでなく、学習した成果あるいは蓄積した知識を生かせる場としても、期待されるような場になったのです。

また、博物館活動を豊かにしていくためには、館の職員、予算、施設、資料だけでは限界があります。そこで、博物館だけでなく、いろいろな人々、機関、いろいろな所と連携、協力をしていく博物館が多くなりました。たとえば私どもの国立科学博物館では、企業とも協力します。とくに新聞社やテレビ局などのマスコミ、展示会社と協力したり、学会や大学とも協力します。大きな展覧会は企業や学会との共催で開催します。日本建築学会と連携して「親と子の都市と建築講座」を開いたり、日本科学史学会と連携して「科学史学校」という講座を開くなどしています。変だと思いかもしれませんが、去年は上野にある老舗の商店のグループに加盟しました。「上野のれん会」という名前で「うえの」というタウン紙、雑誌を出しているのですけれども、そこによく取り上げてもらうとか、いっしょにイベントをするようになりました。

そして、そういう博物館以外の人々との連携、協力というなかでも、地域の人々に博物館に入ってもらってその視点を生かす、あるいは知識、経験、能力を生かしていただくことの重要性が認識されて、ボランティア制度の導入が進んできたということが背景にあると考えています。

## 2 博物館ボランティア活動の意義

### (1) 博物館から見る博物館ボランティア活動の意義

ボランティアの方に博物館に入っているいろいろな活動をしていただくことによって博物館はどうなるかということですが、私どもの博物館では、参加体験型展示における子どもたちへの指導助言だけでなく、案内所でお客さんへの案内・情報提供、見学の相談もしていただいていますし、ガイドツアーもしていただいています。さらには工作や実験など教育普及活動の協力、場合によっては企画などもしていただいています。そういうことによって博物館活動が拡充され、サービスが増えました。今までやれなかったことがやれるようになったり、今まで1週間に1回しかできなかったものが毎日やれるようになったなど、ボランティアの活動によって博物館活動が拡充されて、より豊かな活動を行うようになりました。

あるいは、博物館員以外の方が博物館に入ることによって、地域住民の視点が博物館に加わりました。とくに、高齢者の視点、博物館には定年制がありますから高齢者はいませんの

で高齢者の視点は重要です。あるいは障害者の視点、このように様々な視点で博物館はどうあるべきか、どういうふうにしたらもっとよくなるか、博物館のなかでいっしょに考えていってもらい、生かしていってもらいということは非常に重要なことだと思います。

それから広報の役割も果たしてくれます。その博物館が好きだからボランティア活動をしたという方々です。今度の展覧会がすばらしいと思ったら人に話してくれるものです。あるいは人にチラシを渡してくれたり、多くの人が見る公共的な場所にポスターを貼ってくれたりする場合があります。さらには、高齢者の団体を連れて来てあげるとか、国立科学博物館ではボランティアがそのようなことをしてくれています。

また、ボランティアという協力者が博物館にいたことがどんなことで助かるか、プラスアルファになるか分かりません。たとえば、こんなことがあります。私どもの博物館ではさわられる標本とか資料をセットにした「森の標本箱」と名付けたものをいくつも作っています。そのなかではボランティアの方に協力してもらっているものもあるのですが、ヘビ、セミ、シダ、冬芽など、いろいろなものがあります。その一つに砂があります。はじめに砂のセットを作るために全国の海岸の砂を集めたいと思った職員は、どうやって集めたらいいだろうかと悩みました。そこで、ボランティアの掲示板に「全国各地の海岸へ旅行に行ったら海岸の砂を取ってきてください」と書きました。そうしたら、半年で全国、北海道から沖縄まで約70箇所の砂が集まりました。その担当の人はびっくりし、感動し、感謝しました。ボランティアが私たちのところは220人ぐらいいらっしゃいますが、そのことはすごいことなんだなあ、どんなことで協力してもらえるか分からないのだなあ、と思ったものです。

ボランティアの方の活動や笑顔が魅力になるということもあります。私どもの博物館ではボランティアが毎週土曜日に交替で観察、工作などの教育普及活動を企画、実施しています。毎月第2土曜は化石のレプリカづくり、第1土曜は科学ショー、野鳥の観察会もあります。そういう催しにはリピーターのお客様もついています。また、毎日3回実施しているガイドツアーに何回も参加してくれるお客様もいらっしゃいます。礼状やファンレターが来ることもあります。このように、ボランティアの存在が博物館の魅力になっているということがあります。

## （2）博物館利用者からみる博物館ボランティア活動の意義

博物館利用者にとっては、まず（1）で話したように、博物館がより活発な活動を行うようになって魅力的になります。

また、ボランティアが活動していることによって、博物館がより身近で親しみやすい存在になる、あるいは明るい雰囲気になる、あるいはコミュニケーションができる雰囲気になる、などということが言えます。もちろん、博物館が魅力的になるというのは当然のことです。

数年前に、北海道の札幌市芸術の森野外美術館に行きました。野外に彫刻を50いくつ展示してあります。そして、その美術館ではボランティアのガイドツアーをウリにしている、チラシを作ったりしています。30分コースと1時間コースがあります。窓口でどちらにしま



すかと聞かれたので、私が「午前中空いているので、何時間でもいいのです」と言いますと、窓口の向こうでは困った人が来たというか、どうしようかという感じで相談をされていました。やがて、60歳代半ばのおじさんが出て来て「私が案内しましょう」と言ってくれました。そして、2時間半、晩秋の美しい札幌の森のなかで、私の後ろにいたお婆さんたち3人もいっしょにガイドツアーをしていただきました。ふつうは1時間なのに何で2時間半になったかという、ふつうはこの作品が何という画家が何々の時代に作ったもので、何々を使って作った、このタイトルはこういうことにつけられたと言われている、などというのですが、それをいろいろとプラスアルファをしていただいた。たとえば、「この彫刻は解説パネルがある方が正面ですから正しくは今見ているように見るべきなのですが、ちょっと気をつけてこっちへ来て見てください」と言われて、彫刻の少し斜め横へ、少し斜面を下りて見ました。すると、彫刻の斜め横顔が紅葉の山をバックにして美しく見えるのでした。また、「この彫刻とはじめて出会ったのは今から30年少し前、結婚する前に女房と東京のさる美術館へ行ったときでして・・・」などということもあって、2時間半たってしまったのでした。とても楽しく美しい2時間半でした。家へ帰ってみて思い出してみると、50いくつか見た彫刻は3、4個しか覚えていなくて、「ああ、いい人だったなあ、楽しかったなあ」という印象ばかりが残っているのです。

ボランティアの、この作品が好きだから、この画家が好きだから伝えたいという熱い思い、あるいは科学博物館ならば、この展示の実験の面白さ、この自然のすばらしさを子どもに知ってもらいたいと、一生懸命やる、その熱い思いがお客様に、びんびん伝わってくるのです。また、その人の展示との人生における関わりが話に彩りを添えることもあるのです。

ボランティアの説明は専門家の説明とは違った価値があります。聞く方は相手が専門家だと大所高所に立った素晴らしい話が聞けると思いながらも、反面、専門家にこんなことを質問したら恥ずかしいなということがあります。それがボランティアの方であれば、同じ市民同士、質問がしやすいということがあります。そして、コミュニケーションが行われる。場合によってはお客様からボランティアが教えてもらうということもあります。教えあい学び



あいの場になるということもあるのです。

ボランティアに話を聞いてもらえるということも大きな意味があります。人は感動したことはしゃべりたいものです。感動したこと、発見したこと、知っていることは話したい。子どもは面白いものを発見すると「わあ面白い。ママ来て見て、早く早く・・・」と言うでしょう。たとえば、私どもの科学博物館で「パンダに会えてよかったわあ、前に上野動物

園に行ったときによく見えなかったのよ、今日は動かないのでよく観察できたわよ、骨まで見えたしね」などと言う人もいます。ボランティアの方々には、人に話を伝えるだけでなく、人の話を聴いてあげるといふのも大切な活動です、と言っています。

また、私たち博物館員は展示を見たり教育普及活動に参加して満足していただきたいのですが、お客様は何に満足され、評価をするか分かりません。たとえばレストランの「草食ランチ」が面白くておいしかったから、今度は「肉食ランチ」を食べに来ようと思うかもしれません。ミュージアムショップにいいものがたくさんあったから、今度人にプレゼントをするときにはここに買いに来ようとか、あるいはボランティアさんの笑顔が素敵だからあの人にまた会いたいなど、どこで評価されるか分からないということもあつたりします。そのことをしっかり意識しているところなど注意しなければならないと思いますが、ボランティアのホスピタリティ、おもてなしというものは、利用者にとってもたいへんありがたいものだと思ひますし、マイナスにならないように気をつけたいものです。

### **(3) ボランティア活動者からみる博物館ボランティア活動の意義**

ボランティアから見ると、先ほど言ったように、学習成果を蓄積し、知識を生かすことができる、自分が社会参加をすることなどが言えます。そして活動をしていろいろお礼を言われたり、あるいは「そうですね、楽しいですね」と共感されたり感動されたりすれば、それはボランティア自身にとっても大きな喜びになるし、達成感を得ることができます。

それから、新たな世界に入る、新たな人間関係に入ると言えます。ふつう我々大人は家庭、地域、職場の人間関係のなかで生活しています。家庭を血縁、地域を地縁、職場の人間関係を職縁と言い、私たちはそういう人間同士のコミュニケーションの中にいます。でも、ボランティアはそういうものとは違う人間関係です。人によっては遅くまで仕事をし、休日出勤もし、地域との関わりどころか家族との関わりもあまり持てない人もいます。ほとんど職場だけの関わりで、退職後が心配という人もいますね。

国民生活白書というのがありますが、その平成12年版の副題は『ボランティアが深める好縁』です。「好縁」は好きな縁と書き、好きなことをする人たちが集まる人間関係—グループの縁です。好きな人たちが集まって何かをする、とりわけ社会のためにボランティア活動をするのは非常に大切なことで、社会として大切に伸ばしていかなければならないということが書いてあります。

### **(4) 地域社会からみる博物館ボランティア活動の意義**

博物館でボランティアがいろいろな活動をすることによって、博物館という生涯学習施設の教育機能が上がる、地域の教育力が上がります。博物館でボランティアがお客様に案内、情報提供、相談活動をする、学習を手伝ったり、ボランティア自身が教育活動をしたりすることで人間同士のコミュニケーション活動が活発になり、地域が暖かくなります。

とりわけ子どもにとっては良い影響があると思ひます。今の子どもはあまり大人とつきあっていません。親、先生、プラス塾の先生ぐらいとしか関係しない子が圧倒的に多い。その

大人たちは子どもを評価し、励ます存在です。「まだまだ」「もっとがんばれ」という存在で、子どもによっては煙たい存在です。それが博物館に来ると、親切でやさしい大人が「これやっごらん」「どうしてそうなるんだろうね」、さらには、「よく分かったね」「よく知っているね」などと言ってくれる。それは、子どもの大人への見方を変え、世界を広げる意味で、とてもいいことなんじゃないかと思います。

また、ボランティアがバッジやユニホームを着て、お客様が見えるところで、生き生きと楽しそうに活動をする。お客様はその活動に接して「ボランティアの方の説明によってこんなことが分かった。面白かったな」とか、「ボランティアの方はすてきだな」というふうにする。そのことは社会における文化、教育関係のボランティア活動の意義、すばらしさを認識してもらうことになると思います。

### 3 ボランティア活動のとらえ方

#### (1) ボランティア活動の規定

ボランティア活動について「ボランティアでやる」という言い方がされることがよくあります。それは、タダでやる、というイメージがあるように思われます。

しかし、一般的には、つまり、ボランティアに関する本、ボランティア・センターなどのパンフレットなどでは、3原則あるいは4原則、まれに5原則と言われています。それを整理すると、ボランティア活動は、自ら進んで、社会や他者のために、対価を目的とせず、現状をよくするために、その場だけでなく、続けて自分を提供する活動である、ということです。一番言われている3原則は、自ら進んで（自発性、自主性、主体性）、社会や他者のために（社会性、公共性、公益性、利他性）、対価を目的とせず（無償性、無給性、非営利性）ということです。

ボランティア活動を実践する際に一番大切なことは、まず対象と内容をしっかり理解すること、福祉のボランティアでは相手の苦しみとか悩みを理解して、それに寄り添いながら、共感しながら自分にできることを行うことです。たとえば足の悪いおばあさんのために、お金を預かって買い物してきてあげる。それは、自分の時間と肉体を少し使うことで、相手の苦しみを少しでも軽減させてあげることです。これは、自分でも少し苦しむことでおばあさんの苦しみを少し減らしてあげるということで、言い換えれば苦しみを分かち合うということではないかと思います。この「分かち合い」は福祉のボランティアだけでなく、教育、文化のボランティア活動においても同じです。「これ面白いでしょ、これ素晴らしいですね」などと、知識や感動を分かち合うのです。分かち合いは心がこもっていなければならないと思います。共感して、心の分かち合いをする、これはボランティア活動の基本ではないかと思います。それは互惠性、つまり、互いに恵み合うことだとも言えるでしょう。

#### (2) ボランティア活動をする動機

世のため、人のためにやるのがボランティア活動ですが、それは、身を挺して、自分をな

げうってやるのかということ、実際はいろいろな動機があつていいのではないかと思います。

黒川育子さんという人が朝日新聞社から『ニューヨークのボランティア』というタイトルの本を出しています。ニューヨークのボランティアというタイトルのとおりで、黒川さんはニューヨークでいろいろなボランティア活動をしている人に、繰り返して同じ問いかけをしたそうです。読みます。「私は「なぜボランティアをしているのですか？」とエイズ患者を世話をする人、ホームレスと一夜を過ごす人、お年寄りの面倒を見る人、ハンディキャップを支援する人に、繰り返し同じ問いを投げかけた。誰もが最初に答えるのが、「Because I feel good」(気持ちがよいから)という、明快な一言だった。それじゃ、なぜ気持ちがよいの？と突っ込むと、みんなウンと唸って自分の心に聞いてから、「得るものがあるから、見返りがあるから」と答え、それについて静かに語ってくれた。そして、「ここでいう見返りとは金銭の報酬や名声を得たりすることではない。充実感や達成感を感じたい、社会の役に立っているという満足感を得たい、社会に目を向けている自分を表現したい、友人の和を広げる社交の機会にしたい、どこかに所属している意識をもちたい、経験したことのない未知の仕事に挑戦してみたい、就職に役立つように経験を身につけ技術を習得したい、健康を維持したい、などがアメリカ人がボランティア活動に期待する見返りである」。さらに、「ボランティアたちが近づこうとすれば、助けられる人も歩み寄ってくる。二者の関係は強者・弱者の上下関係でなく、痛みを共感する並列関係に発展していくのである。それは助ける人と助けられる人の双方がともに育てあげていく関係である」。

科学博物館でボランティアが人にものを伝える、あるいは教える場合、教えていたつもりがいつのまにか、お客様の方から、「それってこうなんですよね」と、かえって教えられたり情報ももらったりしています。ボランティアは教えあい学びあいです。

### (3) ボランティア活動と生涯学習

ボランティア活動と生涯学習は共通性があります。それは自発性です。両方とも自発性が大切です。いやいやながらでなく、自分に責任を持って、自分がやるべきだと思うから、やってみたいからやるのがボランティア活動だと思います。学習もいやいやながらやるのでは、頭に入っていきます。自分が勉強したい、自分がやってみたいという学習であるならば、どんどん勉強します。そして学習課題が出て来て、誰々に聞こう、博物館や図書館に行ってみようということになります。そこに共通性があります。自発性が大切なのです。

そして、この話のはじめの方で、ボランティア活動は学習した成果を活動に生かすと言いましたが、活動することによって、学習が触発されます。質問をされて答えきれずに課題が生じたり、こんなことも教えられるように勉強しておこうと思ったり、さらには、こんなふうに話しているが子どもはのってこない、どうしたら子どもの興味を引き出せるのか、などと教え方の課題が生じたりします。あるいはお客さんの方がよく知っていて、情報を教えてもらったり、触発されたりと…、ボランティア活動と生涯学習は循環性があります。

しかし、決定的に違うことがあります。それは責任です。学習には責任がありません。自

分ができなくなればいいだけです。一方、ボランティア活動には責任が伴います。いつ、どこで、何の活動を、どういうふうにやると約束したならば、そのことは期待され、約束を守る責任が生じます。それは福祉のボランティアであっても、文化や学習のボランティアでも同じです。

私どもの博物館では動植物や地学に関する観察会のボランティア活動があります。朝、集合場所に旗をもって立って受付を行い、引率は先頭に講師が、ボランティアが一番最後から行って、講師が説明をする際は集合を呼びかけたりします。薬箱を持って行って簡単なキズや虫刺されに対応したり、歩くのが大変なところでは参加者が置いていった荷物の番をしてあげるなどの仕事もあります。あるとき、観察会終了後にお客様から苦情がありました。それはボランティアが講師を独り占めにしたというもので、受付などの活動はしたものの、ボランティアが講師を質問攻めにし、ボランティアのための学習会のようなものだったということです。植物が好きだから植物の観察会の活動をしたというのは結構です。しかし、ボランティア活動の目的は観察会実施の協力、参加者の学習への援助であり、自分自身の学習が第一の目的であってはなりません。そうであるならば参加者として観察会に出るべきです。交通費が出るからボランティア活動にして好きな植物を学習してしまえという考えは困りものです。活動は活動、学習は学習に分けて考えていただくことが大切です。

しかし、その上でこういうこともあります。講師から「質問はないですか」と言われたとき、お客様が全員黙っていました。そこで、ボランティアが「これってこういうことなんですか」と質問した。そうしたら、講師の人が「ああ、いい質問ですね、これはですね…」とお客様が聞きたくなるような話をさらに深めることができた、などということもあります。そして、終了後、講師が「いい質問してくれましたね」と言って、もっと深いプラスアルファの知識をたくさん教えてくれた、などということもあるそうです。

#### 4 博物館でのボランティア活動における留意点

##### (1) ボランティアとしての責任と自覚

ボランティアには責任があると言いましたが、いつ、どこで、何を、どうする、約束したらその約束は責任をもって守りましょう。また、基本的なマナーを守りましょう。言葉使いはていねいに、はっきりと、服装はこざっぱりと……。

私どもの博物館は上に着るユニホームはありますが、下はなく自由です。で、あるとき、私と同年輩の男のボランティアが、半ズボンをはいてきました。半ズボンをはいたっていいんですが、足があまりに毛むくじゃらで子どもがびっくりしてしまうだろう、ちょっとそれはまずいんじゃないの、ということで、足が見えない活動にしてもらいました。今年の夏、夏休みだけの学生ボランティアを導入しましたが、「ヘソは出さないで」とか「胸が開いたTシャツは着るな」など、心配でそんなことを言いました。ボランティアのプロは目立たず活動しやすい服装をします。目立っていいのは展示でありお客様なのです。

タダでやるのがボランティアではありません。社会のために、人のために自ら進んで責任を持ってやるのがボランティアです。ですから、「タダでやっているのだからありがたいと思いなさい」などと思わず、ボランティアとしての誇りを持ってやりましょう。

## （２）施設ボランティアとしてのあり方

活動する博物館の施設の趣旨、目的、活動の内容、方法、活動の際に気をつけるべきことをしっかり理解して、施設側に立って、施設のスタッフの一員としての意識で活動しましょう。施設を批判するために活動しているのではないのです。施設の協力者、施設利用者の援助者として活動するのです。建設的な意見、提案は言うべきですが、とくに外部の人に対して自分の立場を間違えないようにしましょう。

たとえば、国立科学博物館では雨の日にも傘立てがありません。傘入れのビニール袋を提供するだけです。それは一日の入館者がたまに1万人を超えることがあったり、遠足、修学旅行シーズンには同時に5、6校の団体が入ることがあるのです。傘立てを千個分出しても足りないときがあるのです。その空間がないから、ビニール袋を出しています。4月にボランティアになった人はまだ事情がわからず、お客様から「傘立てが無いなんて、ちょっとこれサービス悪いんじゃない」と言われたりします。そのときに、「ほんとうにこの博物館ひどいですよね」と言ってほしくないわけです。でも、6、7月になると傘立てがいくらあっても足りないなど分かってくるのです。ほかにもいろいろなことが分かってくるのです。入ってすぐに博物館やボランティア活動に判断をくださずしばらくはじっと観察し、どうしてこのような現状なのかを理解しようとすることも大切です。

また、分からないこと、あやふやなことは言わないようにしましょう。分からないと言うことはときに恥ずかしく思うことがあるかもしれませんが、勇気をもって言いましょう。まちがったことを言った場合は苦情が館に来ます。

## （３）コミュニケーション

お客様との関係では、言葉をはっきりとていねいに言うとか、話を聞くのも大切だとか言いましたが、まずはホスピタリティ、もてなしの心が大切です。笑顔とコミュニケーションを大切にしようと思いがけてください。お客様は博物館にはじめて来て、何だこの博物館はと思ったら二度と来ません。その一回が大切です。お客様に歓迎されている、安心して見学できる、と思っただきましよう。見学の際にはリラックスしてもらえるかどうか大きい。博物館のなかを歩いたり展示を見たりする精神的な状態が違ってくるのです。それが悪いと、いろいろな部分に悪い印象を持ちます。

また、いつも同じ事をしていてもマンネリにならず、いつも新鮮な気持ちで、お客様とは一期一会の出会いだと考えましょう。日々新たなりと言いますか、今日もボランティア活動ができる、このボランティア活動ができるという機会を大切に、今日もお客様に喜んでもらおう、コミュニケーションを大切にしていこうという気持ちで接していきましょう。

それから、言いにくいことですが、年下の者や異性に対して、特に年上の男性が若い女性

に対して見下すようなことは絶対にやめていただきたいと思います。ボランティア同士の人間関係というのは平等です。社長さんでも大学教授でも、主婦でも予備校生でも、みんなボランティアとして平等で、肩書は関係ありません。ボランティア活動をやりながら、ボランティアとしての実力、人間力でボランティア社会の人間関係ができていくのだと思います。

#### (4) その他

ボランティア活動をやればやりがいがある、学習ができる、友人ができるなどと、いいことばかり言いましたが、やりさえすれば天から降ってくるものではありません。自分に責任をもって、主体的に、工夫して、努力してやることによって得られるものです。そして、努力の中に謙虚さと向上心が大切です。

皆さんいっしょにいろいろな活動をしていくのですから、お互いに手を取り合って、お客さんに喜んでもらおう、励まし合いながら向上し合おう、そして、職員とも手を取り合っていい博物館をつくっていかうという姿勢で、楽しみながら適度に頑張ってもらいたいと思います。

講師紹介：学習院大学文学部卒。図書館勤務を経て、平成元年から国立科学博物館勤務。

論文等：「ボランティアによる博物館活動の活性化」『博物館研究 平成12年6月号』

日本博物館協会 2000.5

「自発性、創造性を引き出す施設ボランティア活動の開発」『日本生涯教育学会論集 21』 日本生涯教育学会 2000.7

「展示と見学者を結ぶボランティア活動」『全科協ニュースvol.32 No.2』

全国科学博物館協議会 2002.3

#### 博物館ボランティアシンポジウムについて

- 1 目的・・・博物館ボランティアに関する講演、パネルディスカッションなどを通じて、県民の博物館ボランティアに対する理解を深め、県内各館のボランティア受入れを促進するために開催。
- 2 開催期日・平成15年11月1日（土）13：30～16：00
- 3 会場・・・山口県セミナーパーク（山口市秋穂二島）
- 4 主催者・・・山口県博物館協会
- 5 内容・・・(1) 基調講演「博物館ボランティア活動の意義と留意点」  
講師：国立科学博物館学習支援課長 石川 昇 氏  
(2) パネルディスカッション「博物館ボランティアの取組みと課題～開かれた博物館をめざして～」  
パネリスト：山口県立美術館、下関市立美術館、萩市郷土博物館  
下関市立しものせき水族館『海響館』

## 博物館ボランティアの取組みと課題

### ～開かれた博物館をめざして～

指導助言者：石川 昇（国立科学博物館学習支援課長）

パネリスト：前田淳子（山口県立美術館専門学芸員）

井土 誠（下関市立美術館館長）

石橋敏章（下関市立しものせき水族館「海響館」館長）

大嶋 恵（萩市郷土博物館庶務係長）

司 会：松尾勝美（山口県立山口博物館館長）

#### 自己紹介と各館の受入れ状況

松尾 県立山口博物館の松尾です。本日のパネルディスカッションの司会を仰せつかりましたので、よろしくお願いします。本日のタイトルは「博物館ボランティアの取組みと課題～開かれた博物館をめざして～」です。パネリストは県内の4館からご出席いただいておりますが、会場には現在ボランティアでご活躍の方も来ておられるようですので、ぜひご発言願ひ、本日のディスカッションが実りあるものにしていきたいと思いますので、ご協力よろしくお願いします。

それではまずパネリストの方々に簡単に自己紹介していただくとともに、各館のボランティア受入れ状況として、人数、仕事の内容などお願いします。

前田 一昨年から県立美術館に参りまして、ボランティア立ち上げをしております。それまで、10年間、北九州市立美術館でボラ

ンティア担当をしておりました。県立美術館では、昨年からはボランティア募集を行っており、1年間の養成研修を終えて、34名が活動しています。ボランティアは5グループに分かれ、展示会のサポート・紹介班、教育普及班（主に子ども対象）、ホームページ作成班、ボランティア相互の交流を深めるための広報班、資料整備を行う情報整備班として活動しています。この班分けはボランティアの人たちが自分で、お客さんと美術館に対してできることは何かを考えてもらい、その意見をまとめた結果です。

この5班は、面白いことに、展示会サポート班、教育普及班、ホームページ作成班の3つ





が来館者向けの活動、広報班はボランティアがうまく活動していくためには何ができるかを考える活動、情報整備班はボランティアを支える活動の3タイプの活動に分類できます。

現在、12名が養成講座を受けておられます。この養成講座の一環として、県美展でポスターの原画審査、ギャラリートークなどの活動を行っています。ボランティアの年代は、10代の大学生から70代までバランスがよく、ほとんどが女性で、男性は3人だけです。

**井土** 当館では、昭和58年開館後、今年で20周年になります。ボランティア受入れ状況は、男性8人、女性42人の合計50名です。当館のボランティアは美術館友の会会員であり、友の会がボランティアを組織して美術館運営に協力しています。業務内容としては、美術館コレクションを展示している土・日の解説、特別展開会式の際の受付、友の会総会などの受付等雑務、友の会主催の有料ギャラリー・コンサートの入場券モグリなどです。その他、資料整理業務として新聞記事切抜きとスクラップ作成、展覧会のポスターや広報誌の封入と仕分け、ギャラリー・コンサートの会場作成などです。

**石橋** 当館は平成13年4月にリニューアルオープンした新しい施設です。92名のボランティアの方が展示解説を行っていて、多くは下関市、北九州市の方です。魚名解説板で一応説明してあるのですが、ボランティアの方の肉声で、下関市に因んだ話を交えて解説してもらっているのが好評です。その他、イベント会場設営、案内、夏は客が多い時期なので、適切な誘導や、アシカ・イルカのパフォーマンスについてのお知らせなどです。

ボランティアの方は積極的な方が多いようで、当館の無料ゾーンでの催事『マンボウ川柳』はボランティアの方が自主的に企画・運営までを全部やっています。これはお客様が館内見学後、感想を川柳にして投稿してもらい、その中から優秀作品を選考し、貼り出し等を行うものです。館職員、展示係だけでは手一杯な為、他にもイベントのお手伝いをお願いしています。例えば、月毎のテーマで魚や動物の絵を描いたり、折り紙をする会の指導・整理、コンテストの作品整理などです。

受入れ状態は、オープン前に募集開始し、平成10年度に10名、11年度に10名、12年度に40名、13年度に50名で、その後は新規受入れはありません。研修は10時間受けていただきましたが、開館以後の混雑状態でその後行っておりません。今後新たな業務を依頼するため、新規受入れを考えております。

**大嶋** 当館は平成12年に、国道拡幅により萩市堀内地区に新博物館を建設中です。今年9月に竣工し、新館開館は萩市開府400年を記念して来年11月11日に予定しています。当館を名実ともに『市民とともに歩む博物館』にするため、ボランティアの方を活用しようと決めたのが今年の3月です。県立美術館の前田さんの指導も受けて、博物館ボランティアの登録を行いました。当館は総合博物館であって、自然、歴史、生活文化、産業、考古、天文、その他の7分野について、資料作成、聴古の助手、企画立案実施、展示解説、情報センターの機械器具取扱いなどを行ってまいります。これらの業務のうち、希望するものを申請してもらいました。当初

20名程度あれば良いと思っておりましたところ、男性56名、女性51名の合計107名も登録希望があり、しかも市外からも28名、金沢からも希望がありました。

館自体が完成していないので、ボランティアの方と一緒に新しい博物館の開館、活動についてなど、本当の意味での市民の博物館となるよう努力しています。

### 受入のきっかけ、人集めの苦労話

**松尾** ありがとうございます。博物館ボランティア受入れについては、何と言ってもスタート時のご苦労が大変だったと思います。そこで、次にボランティア受入れのきっかけや、スタート時の人集めの苦労話など、お聞かせ願えますか？

**大嶋** ボランティアの受入れのきっかけは先ほど申し上げましたので、苦労話をお話しします。107名の年齢もきっかけもバラバラであり、例えば新しい博物館での交流を深めたい方や、退職された方が何かをしたい方など。萩市は有償ボランティアなので、仕事としてとらえている方がおられるなど、それぞれの方の背景がかなり違っており、館として個々の事情を把握して新しい活動に支障がないよう努力していきたい。

**石橋** 人集めという点では、逆にお断りするのが多くて当時のコーディネーターは苦労されたようです。第一次募集で、平成10年～12年と募集していますが、受入れ態勢が十分できていなくて、段階的に増やしていきました。オープン後1年間で140万人のお客さんが入られたので、ボランティアの方を60名登録していましたが手薄ということで、14年の頭に第二次募集をかけました。

ボランティアの方には生き物が好きな方が多く、面談の中で作業内容をお知らせしますが、「解説」だけでは欲求不満になる方があります。現在92名の登録がありますが、すべての方が活動に参加されているわけではなく、大体50名前後の方が活動されています。



**井土** 私どもでは、友の会でボランティアの組織化をさせていただいております。友の会の創立は昭和60年です。この会は下関市立美術館を支える組織で、美術館の活動をボランティア的に支えてもらっていました。友の会ができたときに、もう少し多くの方に声をかけようということで、ボランティアの募集を広報誌を通じて行いました。当館は小さな美術館なので人手が足りなく、色んな方に協力していただいていたのですが、必要に迫られ既にあったものが、ボランティア組織としてづくりされたのです。

人集めの苦労話としては、今なおもっと多くの方に入っていただくため、美術館の広報誌で常に募集をしています。インターネットのホームページでも募集しています。

ボランティア組織は美術館友の会がお世話をしていることもあって、市では関知してい

ません。市とは別の組織になっていることが、美術館の特徴であるとともにデメリットになりかねません。ボランティアをされる方には、友の会に入り、会費を払ってボランティア活動をしていただくことになっていて、今後どうするか色々想定はしていますが、独自にボランティア組織を立ち上げることは考えていません。

**前田** きっかけですが、県立美術館では、平成8年の県美展から5年ほど県美展に限って活動するボランティア活動を行っていました。毎年10名程度ですが、人集めに苦勞していて、ほとんどのメンバーが大学生でした。「県美展だけではもったいない、通年で色んな活動をしていただけないか」ということで、昨年からはボランティア制度を正式にスタートさせました。1年目は心配していましたが52名の応募があり、1年間養成講座を受けて、最終的に35名が残られました。こちらとしては、半分程度残られるのを予想していましたので、まずまず安心しました。2期生は12名でまだまだPRが足りなかったと反省しています。

人集めの苦勞よりも、養成講座の時どういう内容にするか悩みました。華やかな展覧会だけでは分からない美術館の裏側を知っていただく内容とか、ボランティアとして活動してもらったときにどのような活動があるとか、内容編成に苦勞しました。

**松尾** このあたりで、博物館ボランティアの老舗というか、草分けの存在である科学博物館の石川先生にアドバイスなどお話をいただきたいと思います。

**石川** 山口県でもボランティアの受入れがされつつあるので、楽しみだと思いながらパネリストのご発表を聞いていました。職員の方向けに博物館でボランティア制度を取り入れるについて、何が大切かをお話ししたい。

一番大切なことは人集めに苦勞しないためにも、やりがいのある、魅力ある活動を用意することです。ボランティア活動をどう捉えるかを館、受入者側全員で共通理解を図ること、安価な労働力と捉えないでください。ボランティアの方は指示、命令系統で動くのではありません。自分の部下ではありません。mustで動くのではなく、want、shouldの論理で動くのです。次に、そういうボランティアの方の、自分を生かしながら博物館利用者の人に役立ちたいという気持ちを大切に、どういう博物館、美術館をつかっていきたいか、ボランティアの人たちにこういう活動をしてほしいという理念というか、あるべき方向というか、夢を共有化するために情報を共有化することが大切です。

三番目に、そういう夢、理想を共有化して、ボランティアの方は共にいい博物館をつくるパートナーだという意識を持つことが必要です。

四番目に理念や夢を共有化するために、情報を共有化すること。なるべく博物館の置かれている状況やめざしているものなど、情報をボランティアの方に開示して、いっしょにどういう博物館をつかっていくか考えることです。

五番目にボランティアの方と信頼関係を築くことです。そのために、挨拶が基本であって、いろいろ情報交換をすることが大切です。あくまで、職員とボランティアとしてどういうふうにあるべきかという関係であって、酒飲んでぐちゃぐちゃ言う関係でなくて、立

場をキチンとわきまえた中での、あるべきアットホームな関係を築き上げる必要があります。このような事を踏まえながら、ボランティア制度を導入していく事が後々対立が起きないで、スムーズにやっていくために必要です。

### 良かったことと課題

**松尾** ありがとうございます。

現在、博物館ボランティアを受け入れられて順調に業務をこなしておられると思いますが、博物館ボランティアの受入れをされて良かったことと、その反対に課題等があればお話いただきたいと思います。

**前田** メリットは、学芸員だけでは考えられなかった活動を展開していただいたことです。このたび、「フィンランドの美術」という展覧会を行いました。私たち職員は作品で美術を紹介することしかできないが、ボランティアの方たちはフィンランドを音楽や食事文化の面から紹介するイベントを考えてくれました。私たちは考えもつかなかった。

あと、人気投票だとか、私たちが考えれば大変だなと思うことを、どんどんやっていただくパワーもすごいと感心しています。

課題は、ボランティアの方が県内各地に散らばっているの、どういふふう連絡を取るかということです。また、週1回集まる機会に、活動もするし、準備、講座もある。どうしても時間が足りなく、どうしたらうまく回るかです。

**井土** 下関市立美術館の場合、ボランティアの方は美術館の利用者でもあるので、常に利用者の美術館に対する考えを把握するのに大変役立っています。そのためにも、色んな形で、来ていただく回数も増やせれば、よりよいと思います。

デメリットは、ボランティアとして美術館に足繁く運んでいただきたいが、ボランティアの方自身に役に立っているのか分からないことです。ボランティアの方を通して、一般利用者にボランティア活動がどのように還元できるか模索中です。ボランティアの方にやっていただく新しい事業を増やしたいが、十分できていないのが課題です。

**石橋** 海響館の場合、通常の協力が大変助かっていますが、その他お客さんの視点で意見をいただくので、大変ありがたい。例えば、お客さんは餌を食べるのを見たいという気持ちがありますが、給餌時間を調べてお客さんに知らせるとか、館内のリターン式コインロッカーに、リターンとしか書いてなくて、「リターンではお年寄りに分かりませんよ」と意見され、早速「100円玉がもどります」というシールを貼ったところ、100円玉の回収忘れが無くなったことなどがあります。

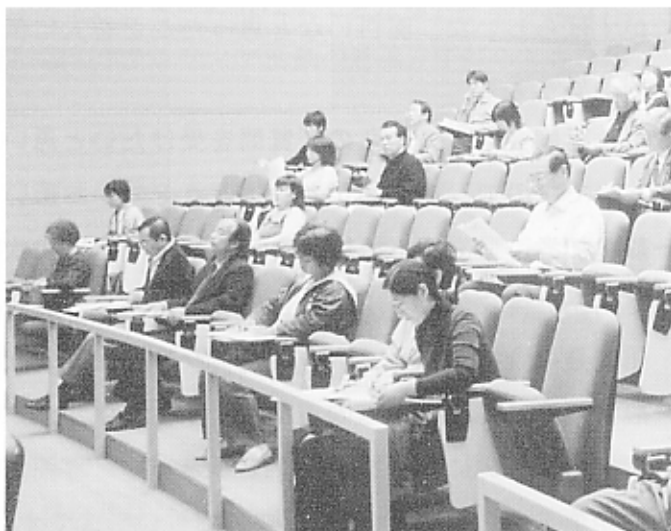
課題は、動物が大変好きなので動物に直接かかわりたい希望が多く、どう対応するかです。

**大嶋** 萩市郷土博物館の場合、ボランティアの募集公告を見て初めて博物館に来たという方が多く、博物館の認知が広がったことがメリットとしてあります。

また、市町村合併が進む中で周辺部の文化が廃れるのではないかという危惧がありますが、文化遺産をキチンと後世に伝えることができるのは博物館であり、博物館活動にかかわることはまちづくりに参加していると言えると思います。

**松尾** このあたりで、会場に来ておられる方で、現在博物館ボランティアとして活動されている方に、博物館ボランティア活動についてのご感想を述べていただきます。良かったこと、悪かったことなど忌憚の無いご感想を語ってください。どなたかご発言願えませんか？  
挙手をお願いします。

**一般参加者** 萩市の博物館でボランティア登録をしています。良かったことは、萩市のことをよく知ることになったこと、自分ができることから始めていけば長く続けることが可能だと思います。



**松尾** ありがとうございます。続いてどなたかありませんか。

**一般参加者** 質問ですが、萩市博物館は有償ボランティアだそうですが、現在登録者が107名と言われましたが、有償だからそんなに多いのでしょうか。

**大嶋** 新博物館の運営を市民とともにしてほしいと市長から指示がでたのが今年の3月でした。正直に言うと開館準備に追われているなかで、館としてはまた一つ仕事が増えるといった感じでしたが、どの地方自治体も同じで財政的に非常に厳しく、博物館の規模は大きくなっても職員の数が増やせないといった状況にあるため、館の業務の中で、例えばワークショップの企画・立案・実施等ができるといった力のある博物館ボランティアが博物館利用者の対応をする、あるいは博物館資料の整理について技能を持っている博物館ボランティアがそういうことをやってみよう博物館ボランティアを指導する、それには責任が伴いますから有償としています。最終的には、市民が市民を指導し、館の職員は行政サイドでなければできない部分をしっかりやっていくといった「協働」をめざしています。

**松尾** ありがとうございます。博物館ボランティアの方及びボランティアを受け入れている各館の双方の意見、ご感想など頂戴しましたので、ここで、石川先生から指導助言をいただきたいと存じます。

**石川** 萩市の場合、しっかりしたボランティア制度をつくるため、いい人たちにたくさん集まってもらいたいと考えられたけれど、一体どのくらい集まるのかという心配があつて、有償ボランティアという仕組みでスタートされたのだと思います。たぶん、多くの登録があったことは、うれしい悲鳴であつて、萩市の周辺にはボランティアマインドがあるのではと思いました。

いつも、こういうところから出る質問は、館とうまくいっていない場合やボランティア同士が対立しているとかがよくあるのですが。「〇〇がダメだ、〇〇が足りない、館が悪い」とか言う人がいるんです。よく話を聞いてみると、自分はこっちにおいてあるんです。自分もボランティアに入っているのを忘れていて、自分もボランティアの一員として主体的にかかわって、考えていく必要があるんじゃないかとよく言っています。

また、公に登録しての活動でないボランティアは『おせっかい』のようなボランティア活動もあります。とくに、子どもがそばにいるときに感動したふりをしたり、「これはこういうのかな」などと独り言を言いながら操作したり、解説を読んだりするのです。自分がすばらしいな、面白いなと思ったことを人に伝える、特に子どもたちに伝えることが大切だと思います。

**松尾** 再度会場の方からのご質問を受けたいと思います。批判めいたことでもなんでもよろしいですので、ご質問があればどうぞ挙手をお願いします。

**一般参加者** 県立山口博物館のボランティア取組状況はどうでしょうか。

**松尾** 県立博物館ではまだ受け入れ態勢ができていません。これから取り組むつもりです。

館職員の合意が必要ですので、より良い受け入れ態勢で行う方向で考えています。

**一般参加者** 県立美術館のボランティアですが、県立美術館に対していろいろ意見があってボランティアになりました。もっともっと雰囲気を変えて欲しい。ミュージアムショップの絵葉書なども郵便番号欄が5桁で古い形式です。

**前田** どうお答えしたらよいか、こういうご意見もあるということで、今後の検討課題とさせていただきます。

**松尾** 県立博物館も同じですが、やれることとやれないことがあります、どう対処するか難しい。できるだけ開かれた博物館を目指して、常に反省しながらやっていきたいと思っています。先ほどのご意見は貴重なご意見なので、十分受け止めていきたいと思っています。石川先生何かアドバイスいただけますか

**石川** 私は県立の山口博物館と山口美術館の両方を見ました。県立博物館は確かに古色蒼然としていますが、貴重なもの、面白いものがありそうです。特にトラの剥製、あれはくたびれているかも知れませんが、剥製技術の初期のもので、いいものだと思っています。お客さんに対して、解説パネルがどのように作れるか、あるいはボランティアの人が紹介できるか、今後の課題と思います。

次に、県立美術館ですが、確かにシベリアシリーズは暗いですね。また、絵葉書の郵便番号5桁、困ったものですね。でも、お金が無いのは事実で、その中で博物館として何ができるか、ボランティアの方と一っしょに考えていくのではどうでしょうか。あるいは、



ボランティアとしてできることがあるかも知れないと考えることが必要かも知れません。例えば、葛飾郷土専門博物館では絵葉書を作りました。手作りです。今はコンピュータで手作りで絵葉書が作れます。ボランティアもこんなことが可能じゃないですかと博物館に提案したり、みんなで博物館とボランティアの方がいっしょになっていい博物館を創っていきましょうよ。

### ボランティア活動についてのアドバイス

**松尾** どうもありがとうございました。

時間もかなり経過しておりますので、最後にパネリストの方に、これから博物館ボランティアを行おうとされる方、又は受け入れようとしている館にアドバイスなど一言お願いします。

**大嶋** 博物館でボランティア活動をしながら、楽しんでいただきたいと思います。楽しくないと続きませんし、続けていって始めて取り組んだ意味があると思います。萩市の場合、博物館の方から投げかけている状況で「遊びに来てください」と言ったら、「遊びに行っていないんですか」と言われたことがあります。市民の博物館なのにそう言われて、大いに反省しました。美術館、博物館にどうぞ遊びに来てください。そして、どうぞ楽しんでください。

**石橋** 先ほど石川先生も話されたように、私たちもできるだけ情報をオープンにしたいです。対象が動物ですから、生死はありますので、その辺りの喜び、悲しみを、我々職員もボランティアの皆さんも共有できるパートナーとしてありたい。

**井土** 博物館は利用者の皆さんに利用していただくことで成り立っています。ボランティアの方はある意味で利用者でもあります。しょっちゅう来ていただけるのはありがたい。利用者はどんどん博物館に来ていただいて自分たちの博物館という気持ちを持っていただきたい。私どもの方は、必要に迫られてボランティアをやっていただいている。簡単なこと、できることから始めることが大切で、利用者の方に来ていただくという視点からスタートすれば、いくらでも活動が可能である。うまくいくかいかないかは、人間の交流という原点に立ち返れば難しいとは思いません。

**前田** ボランティア活動が楽しい活動であればよいと思います。後は活動していくことで、楽しいだけでなく、自分のためになるものを見つけていっていただきたい。自分の趣味、知識、経験をどんどん生かしながら、館のためになる、自分のためになる、人のためになる活動をどんどん見つけていっていただきたい。

## ま と め

**松尾** 最後に、本日指導助言をいただいている石川先生から、全体としてご指導をいただきたいと思います。

**石川** 全体として、山口県の博物館、美術館におけるボランティア活動は、始めはああけっこうやっているんだと思いましたが、最後はまだまだかなと思いました。でも、だからこそ、色んな面白いことが行われそうだと思うようになりました。

先ほど、前田さんが、山口県立美術館の「フィンランド美術展」で、ボランティアの方が食事や文化についても紹介するイベントを開催されたことを聞き、すごく面白いなと思いました。それは、職員では考えつかないと思いました。絵を見るときは、絵だけでなく、文化的背景を知ることすごくいいことです。一生懸命フィンランドのことを勉強し、美術はもちろん、それ以外のことも総合的にお客さんに知って欲しいということで、この活動の中で知識の分かち合い、コミュニケーションの深まりがあったんだろうなと思います。それを見に来たお客さんは、ボランティアの方がいることはすばらしいことだな、いい活動をしているなと思われたのじゃないでしょうか。

博物館にボランティアの方がおられることは、博物館の活動が拡充するなど様々なことを言いましたが、魅力を増すことにつながると思います。ぜひみなさん、博物館は行政、教育委員会、職員などのものでなく、自分たちもいっしょになっていい館づくりをしようと思えましょう。お客さんに喜んでもらおう、そして自分を生かしていこうということで、もっともっと積極的にかかわっていただけたら、きっと山口県の博物館が魅力的になるし、リピーターも増えると思います。

私は山口県が大好きです。山口市、小郡町、周南市ぐらいしか知りませんが、今日色々な話を聞いて、萩市や下関市に行ってみたくなりました。これからぜひボランティア活動をしてください。私が行ったら必ず「こんにちは、がんばっていますね」と声をかけます。がんばってください。

**松尾** 本日はみなさまのご協力のおかげで、無事パネルディスカッションの司会を務めることができました。ありがとうございました。本日の基調講演、引き続いてのパネルディスカッションなどをご参考にされ、今後県内博物館のボランティア受入れが推進されることを心から念願しております。それでは最後にお忙しい中、指導助言をいただいた石川先生、パネリストとしてご参加いただいた4名の方々に感謝を込めて、盛大な拍手をいただきたいと思います（拍手）。以上でディスカッションを終わります。



ボランティア集団「田布施町郷土館友の会」の歩み

田布施町郷土館

館長 林 芙 美 夫

田布施町郷土館友の会が発会したのは、平成11年春のことであった。当館は嘱託の館長とパート1名とで運営していることもあって、付加価値をつけた活動をするためには、友の会に負うところが大きい。まずは会則から紹介する。

田布施町郷土館友の会会則

第1条 この会は「田布施町郷土館友の会」と称し、事務局を田布施町郷土館に置く。

第2条 この会は田布施町郷土館が関わる事業を円滑に推進するためのサポート集団とする。

第3条 この会は前条の主旨に賛同し、かつ専門分野の登録者をもって組織する。

第4条 この会の会費は無料とする。

第5条 サポート業務に対する報酬は原則として無償とする。ただし措置可能な場合はこの限りではない。

第6条 会員には田布施町郷土館が関わる文化情報等を送付する。

第7条 会長は田布施町郷土館長とし、事務局長は同館職員とする。

付則 この会則は平成11年4月1日から施行する。

発会時の会員数は有志7人であったが、現在では33人と増加している。これを地域別にみれば、町内在住者15人、上関町1人、平生町2人、大和町1人、橘町1人、柳井市4人、光市2人、下松市2人、周南市1人、岩国市2人、宇部市1人、山口市1人である。

さらに、登録分野別の内訳は次表のとおりである。

考古	4人	発掘	10人	美術	1人	紙芝居	5人
生花	2人	音楽	2人	動物	2人	植物	1人
民俗	1人	歴史	4人	英語	1人		

次に、平成15年10月までに実施した主な分野別サポート業務を紹介する。

(1) 考古・発掘

田布施町域は、県下有数の遺跡や古墳の密集地域と言われている。よき指導者を得て平成11年7・8月の土・日曜日に高地性遺跡大崩遺跡の遺構確認調査を実施し、次いで12年7・8月の土・日曜日に高地性遺跡木地遺跡の遺構確認調査を実施、いずれも調査報告書を作成した。

さらに13年10～12月の土・日曜日に納蔵原2号墳の発掘調査を実施、県下最大級の横穴式石室を有することが判明し、翌14年7・8月の土・日曜日に第2次発掘調査を実施、現地説明会を開催するとともに、調査報告書を刊行することができた。

## (2) 美 術

民俗資料展示室開設に際し、掲出する蠶糸や板海苔の製造工程の下絵描きをしていただき、また田布施地方の民話を紙芝居にする際の原画描きをお願いした。

## (3) 紙芝居

田布施地方に伝承されてきた民話を子供達に語り伝えようと、よき指導者に恵まれて平成15年4月郷土館叢書第4集『田布施地方の口承文芸 民話・民謡・ことわざ』をもとに手作りで紙芝居「石城山の山姥」を制作、桜祭りで初上演を行った。これが好評だったこともあり、さらに10月に第2作「おさん狐」を制作、コスモス祭りで初上演を行った。以後、一般に貸出しするとともに、出前上演を行っている。

## (4) 生 花

発会以来、駐車場の一角に四季折々の花を植えていただいたり、町紹介室に生花を生けていただくなど、郷土館の環境美化のため御協力をいただいた。

## (5) 音 楽

田布施地方の民謡採集時のテープを楽譜に起こす作業を行っていただいた。

## (6) 動 物

平成13年3月田布施町指定天然記念物となった「小行司のギフチョウ」の実態調査や産卵場所の環境整備、また現地パトロールなどの保護活動をはじめ地域住民に対する啓蒙活動などに御協力をいただいた。

## (7) 歴 史

岸・佐藤両家の系譜の作成や館藏品である岸家文書・水井家文書・吉田家文書などを解説していただき『田布施町郷土館研究紀要』に収録、また平成13年には研究紀要別冊として『岸信介幽窗の詩歌集 耐雪』を刊行した。さらに、「なのはなフェスタ」などのイベント会場における展示物の説明要員を兼ねた警備もお願いした。

なお、現在予定中のものとしては大内弘直居館跡の実測調査、田布施の民話紙芝居第3作「雪姫物語」の制作などがある。

当館は無料館であることから、会員に対する特典として入館料免除のような方法をとることができない。現在のところ、文化財情報の発信と年刊の『田布施町郷土館研究紀要』を贈呈することにしている。ともあれ、友の会は同好有志のボランティア集団であり、いずれの場合も和気あいあい、お互いに楽しみながらそれぞれ志す分野の生涯学習といった感が強い。町内外会員諸氏の絶大なる御協力に感謝しながら、息の長い仕事にしたいものと考えているところである。

## 自主的な活動をめざして～山口県立美術館ボランティアの活動

山口県立美術館

専門学芸員 前田 淳子

山口県立美術館では、美術館活動をサポートする組織として、平成14年度に美術館ボランティア制度を設けました。これは、ボランティアに参加された方の知識や経験を生かした活動により、美術館の活動がより広く理解されることをねらいとしたもので、平成8年から活動していた「県美展ボランティア」を発展させたものです。昨年度は1期生52名、今年度は2期生12名の応募があり、1年間の養成講座を修了した1期生34名が6月から活動しています。1期生を例に、これまでの講座や活動内容を紹介します。

### 1 養成講座

養成講座は毎週土曜日の2時間、県立美術館のこれまでの活動や、修復、作品取扱いなど美術館の裏側の仕事についての講座の他、所蔵作品に関する学芸員によるレクチャー、美術館の教育普及活動について行いました。また、講義の聴講だけでなく、県美展のポスター公募作品の選考や、県美展でのギャラリートークなどの実践も多く盛り込んでいます。

講座の最後には、「コレクション101」展(4/15～5/25)の展示作品から1点を選び、3週間かけて勉強し、ギャラリートークを行いました。このため、5週間かけ、お互いに解説役と来館者役になり、練習を重ねました。耳で聞いて分かる言葉で解説できているか、内容、トークの長さ、話す早さ、声の大きさなど、いろいろな点をお客さんの立場で互いにチェックした経験は、来館者の存在を考慮した活動を考える上で参考になったと思います。本番で解説した時には、参加者の熱心な質問や、終わった後の暖かい拍手に手応えを感じたボランティアも多かったようです。作品写真や陶芸の材料などの参考資料を自ら用意し、工夫をこらしたギャラリートークは、我々学芸員が聞いても面白いものでした。

### 2 活動内容

養成講座終了後、どのような活動を進めるか、ボランティア自身に考えてもらいました。美術館に、また来館者にとってどういった活動が必要とされているのか、自分たちにできることは何かを考えた結果、次の5つのグループに分かれて活動をするようになりました。

- (1) 教育普及班:子供を中心とした来館者を対象に、教育普及の企画を考える。
- (2) 展覧会サポート班:企画展をより楽しむためのイベントを計画・実施する。
- (3) ホームページ班:美術館ホームページを制作、更新する。(10月中旬に公開、順次更新)
- (4) 広報班:各グループの活動を紹介し、ボランティア同士の交流が円滑に進むように、広報紙を制作する。ボランティアの活動を館外に紹介する広報紙制作を目標とする。(11月中旬現在、創刊準備号と創刊号を発行)

(5) 情報整理班：新聞の美術記事の切抜きなど、資料の整理を行う。ボランティア室の本を整理し、ボランティアが使いやすい環境を整える。

この5つのグループに分かれて6月から活動を始めたボランティアたちの最初の舞台は7月18日から始まった「フィンランドの美術」展でした。

### 3 「フィンランドの美術」展での活動

(1) フィンランドの豆知識（展覧会サポート班）：我々になじみのない国フィンランドについて、自然、言語、音楽、食、クリスマスの行事など様々な面から紹介するイベント。本の読み聞かせをするボランティアグループ「こどもと本ジョイントネット21・山口」の協力で、展示作品に登場する神話「カレワラ」の朗読を取り入れ、30分程度のイベントを8月2日と8月30日に計4回実施。

(2) 作品の人気投票（展覧会サポート班）：展示作品から9点選び、展覧会会場出口に人気投票のコーナーを設置。展覧会キャラクターの妖精トントゥのシールを来館者の好きな作品の欄に貼り、会期終了直前の8月29日まで実施した。結果は「フィンランドの豆知識」イベントの中で発表し、会期終了前1週間から館内に掲示した。21,453人の入場者の4分の1以上にあたる約6,000人が参加し、来館者同士が投票結果のコーナーを見ながら感想を話すなど、展覧会の作品を印象づける効果があった。



(3) 絵本版カレワラ制作（教育普及班）：展覧会のテーマの一つである神話「カレワラ」は日本人にはなじみのない叙事詩である。「カレワラ」の知識があると展覧会を楽しむことができるため、会場で手軽に読める絵を中心にしたダイジェスト版の「カレワラ」を制作し、会場に設置した。好評で、持ち帰りを希望する来館者が続出した。

(4) 「フィンランドの動物たち」解説カード制作（教育普及班）：展示作品には動物をモチーフにした作品が多かったため、絵の中に登場する動物に対するフィンランド人の意識を子供向けの解説カードにして会場に設置した。

以上の活動はそれぞれのグループが自主的に進めており、美術館側の担当者である筆者はその活動が円滑に進むよう協力し、アドバイスをするに留めています。活動を始めて半年ですが、それぞれの特技や知識が生かされた、我々学芸員では考えつかなかったユニークな活動が展開され、非常に頼もしい限りです。これからの課題は、遠隔地からの参加者も多く、限られた活動時間しかない中で、活動をするためのベースとなる勉強の時間と活動をする時間とを両立させること、ボランティアの活動をより多くの人に知ってもらうことです。来年度は2期生が本格的に活動に加わります。始まったばかりの美術館ボランティアですが、他の美術館にはない、特色ある活動になるよう、更なるパワーアップを期待しています。

### 20年目を迎えるボランティア活動～下関市立美術館友の会の取組み

下関市立美術館

学芸員 岡本正康

**1 ボランティア活動の発足** 本年(2004年)、20年目を迎える下関市立美術館でのボランティア活動は、下関市立美術館友の会によって運営され、友の会会員の有志がボランティア会員として登録されるという形態です(平成15年11月現在 登録者49名)。

下関市立美術館友の会は、下関市立美術館開館(1983年11月19日)の翌年(1984年4月21日)に発足しました(1ヵ月後の5月末で会員数約1,500人)。そのスタート時からボランティアの募集を行いました。当時の記録によると、最初の募集は、18歳以上が対象で、ボランティア講座(昼間3時間×5日)を受講できることが条件でした。同年6月末の募集期限において、さっそく21名の方が参加されています。募集に当たって掲げられた活動内容は、(1)来観者の案内・団体鑑賞者の誘導・案内サービス、身体の不自由な方への手助け、(2)美術関係資料(図録・絵はがき・ポスターなど)の配布サービス、(3)長府(美術館の所在地)を中心とした観光案内、という3つがあります。発足当時の「友の会だより」では、土曜・日曜に当番でボランティアが館に詰め、来観者のお世話をしたことが報告されています。

**2 活動の現状** その後、年月を経て、来観者と直に接する業務である上記の活動内容(1)と(3)は、形を変えることになりました。現在では、来観者の案内や誘導は、特別展の開会式などセレモニーを中心にしたものとなり、定例ではありません。また、特別展の関連行事、とくに実技講座的な色彩のあるものなどについて、臨時に応援をお願いするといった例もありました。来観者向けに定例で行われる活動として、平成14年(2002)春、作品解説ボランティアがスタートしました。館蔵品展についてだけですが、会期中の土曜・日曜に作品の解説サービスを行っています。

解説ボランティアのサービスは、下関市の対岸・北九州市立美術館のものが先進例として全国的にも名高い存在ですが、当館と北九州市立美術館が友の会活動で相互乗り入れをしていることもあり、かねてから当方の関係者を大いに刺激するところでした。当館での解説ボランティアのメンバーは、サービス開始当初8名で、いかにも親密な規模のものでしたが、熱心な取組みぶりは、開始に先立って1年以上にわたり毎月第1・第3木曜日に勉強会を開き、準備を行うほどでした。この勉強会は現在も継続中で、館長を中心に学芸スタッフを講師とする講習のほか、関心を持つ作品やテーマについて各自が研究発表も行い、研鑽を積んでいます。実地においては、会場内に待機し、来観者から要請があった場合に解説を行うというス

タイトルで、一方的に知識を披瀝するというのではなく、まず来観者の感想や意見などを引き出し、コミュニケーションを図ることを主眼にしています。その結果、現場では来観者との本音のやりとりが生まれていることもあり、館員にとってもたいへん勉強になります。

以上のような来観者の目に見える形での活動以外に、もちろん「裏方」のボランティア活動も引き続き美術館を支えています。上記(2)の資料配布サービスは当初から引き継がれており、現在、資料整理（新聞切抜きなど）、ギャラリー・コンサートの会場設営・撤去など、新しい活動内容も加わっています。

新聞切抜きは、毎月第2金曜日と第4木曜日に定例で行われ、地域を中心とする大小さまざまな美術・文化についての情報を分類・蓄積していくことを目的としています。本年度は下関市立美術館の開館20周年に当たりますが、報道機関や下関市の広報誌などの取材を受け、20年の歩みの折々について振り返るとき（最終的な記事に反映されたかどうかはともかく）、こうした切抜きファイルの数々が大活躍しました。学芸サイドで地域の作家や団体について情報収集も行っていますが、それとは別に、こうしたファイルは、地域の共同体に一層密着した情報の倉庫となっており、各種の問い合わせへの対応に役立つという場面も少なくありません。

そしてもう一つ、ギャラリー・コンサートの設営について報告します。年に数回、下関市立美術館と友の会が共催で開催するコンサートは、その都度、ステージ・客席・放送設備などの設営をしなければなりません。機材の運搬や設置・撤去の作業は、職員総出で行う力仕事ですが、ここでは女性の多いボランティア会員のうち、男性陣がその力を発揮しています。

**3 活動の今後** 冒頭でも述べたとおり、制度も年月を重ねるにつれ、活動歴の長いベテランの方々の存在感がたいへん大きいものとなっています。いまのところ牽引役の何人かを中心に、比較的小規模であることがまとまりを維持していくために、都合良くはたらいているように見受けられます。

他館でもある例かとは思いますが、ボランティア登録会員には、下関市職員OBなど行政の経験者も含まれています。下関市立美術館は、館長・副館長以下、学芸係と庶務係合わせて職員10名ほどですが、ボランティア活動を含む友の会事業に専従しているのは、嘱託1名という体勢で、職員OBの方々の応援は心強いものです。その反面、これは、活動が美術館一行政主導であることを暗黙の内に強調している面もなくはなく、また在来のメンバーの結びつきが強いことも、新しいメンバーの加入によって幾分か障壁になっているのかもしれませんが、今後、時とともに否応なしにメンバーの代わりが重ねられると思いますが、組織が開かれたものとして拡大しようとする際、今度は参加者の側から新たな知恵を生み、それを生かしていく仕組みをつくっていく必要があるでしょう。

「あくあは一つ」の活動について

下関市立しものせき水族館

＝海響館＝展示部長 水 嶋 健 司

2001年4月1日誕生した＝海響館＝は、昭和31年に開館し老朽化が進んだ旧下関水族館に代えて市の中心部に建設された新たな施設です。新水族館のボランティア組織化への取組みは、建設が決まって間もなく館内の展示解説に市民のみな様のお力をお借りすることを目的として、平成10年から募集を開始しました。当初3年間で30名のボランティアを養成する計画でしたが、最終年の人員を増やし海響館オープン時には50名体制でスタートしました。

「あくあは一つ」はこの海響館を舞台に活躍する解説ボランティアの名称で、お客様により親しんでいただけるようにとボランティア内の投票により決めた名前です。

事前研修を行ったとはいえ、新施設を利用する研修は限られた時間であったため、オープン当初館内の導線を覚えるのが精一杯でした。開館時には予想をはるかに上回るお客様が来館し、展示解説をすることはとてもできず、トイレと順路の案内に終始せざるを得ませんでした。ゴールデンウィークを過ぎ、やや落ち着きを取り戻してからようやく本来の解説に取り組めるようになったかと思えます。

海響館のボランティアには「このように説明しなさい」というような解説マニュアルはありません。

各自が研修及び個々に学んだ知識をもとにマニュアルを自分自身で作ることとしました。館で用意したものはバインダーと穴あけ用のパンチです。館全体の解説ができるようになるにはかなり時間を要するであろうと考えられましたので、当初各階別に4つのグループを作り、3ヶ月毎に持ち場を入れ替え、1年で全体を一順する形態を取りました。しかし、活動日時の指定もありませんので、ほぼ毎日のように参加される方もいるし、なかなか参加の機会を得られない方もあり、解説内容に差がついてしまうことは避けられません。



これを補うために月例の定例会に合わせ、新着生物や展示変更などを説明する勉強会を設け、情報の共有に努めております。開館から約1年後50名の新規ボランティアの参加を得て現在100名体制にて活動しております。

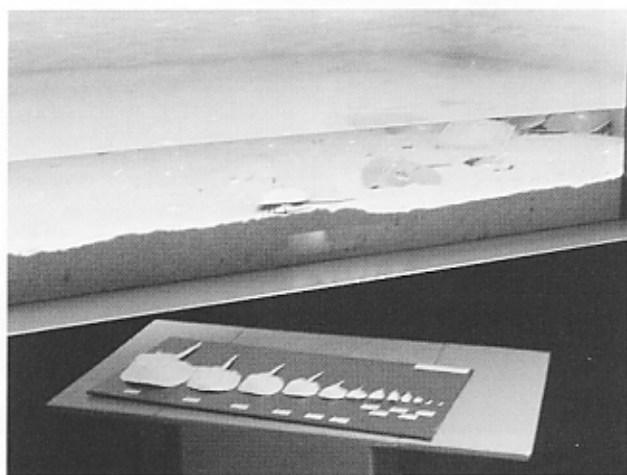
さて、活動の内容ですが、団体などを対象として水族館全体を案内する方法と、定位置に居て決まったエリアの解説をする方法の2パターンを使用しております。どの方法を取るかは各自の知識と好みで決まります。統制の取れない方法だと思われるでしょうが、ボランティア各自の持つ知識や興味が違う中で画一的な解説を強制することは、活動を持続する気持ちを失わせる結果にしかならないと考えています。自身の体験や自分で調べたことに基づいた解説には説得力があり、聞く人を引きつけるものだと

考えます。したがって、より良い解説を目指す方は常に勉強を続け、新たな挑戦に立ち向かっているように思われます。

また、活動は館内に限らず学校や公民館などに出かけて行われることもあります。下関市では教育委員会が仲介する「出前講座」という制度があります。各職場の専門家が学校に出かけ授業を行うものですが、水族館職員もこれに参加する場合があります。このようなとき、ボランティアはたいへん貴重な補助要員としてお手伝いしております。特に低学年の児童を対象とする場合、子育ての経験をお持ちのボランティアは力強い味方となります。



ボランティア活動に対する報酬は一切ありません。しかし、ボランティア自身の生涯学習の場をつくり、観客に説明することから得られる満足感・充実感をご褒美でしょう。これを具体的に実現するため、水族館側で提案したことの一つに「自主研究」があります。いくつかのテーマを提示し、数名のボランティアが研究活動を行いその結果を解説に役立てるというものです。その一つに「カブトガニの脱皮観察」があります。これはこの年に展示水槽内で産卵、孵化したカブトガニの脱皮の様子と成長を観察し、



記録するものですが、ここからいろいろな調査、資料収集が始まり、写真にあるような脱皮毎の成長をわかりやすく解説する模型なども作られるようになりました。また、別チームでは「イルカの視覚・視力と運動能力」の調査研究なども行われており、海響館の公式ホームページの中で研究結果を発表しておりますので、是非アクセスしてみてください。これらの活動には職員も支援しますが、基本的にはボランティアの皆様が自発的かつ自由に行い、たいへん良い結果を生み出した例だと考えています。

今、「あくあは一つ」は新たな挑戦として館内の基本的な展示や、常設イベントへの参加に取り組みはじめています。特に常設イベントについては、運営の一部をボランティアにおまかせする方向で現在お手伝いしております。「解説」という知識や経験を必要とする活動だけでなく、比較的単純な作業を中心としたり、個人の持つ特技を活かしたりすることにより、これまで頻繁に参加できなかった方もより気軽に参加できるような環境づくりにも努めていきたいと考えています。



### 博物館ボランティアのすすめ

萩市郷土博物館

庶務係長 大嶋 恵

萩開府400年を記念して平成16年11月11日に開館する萩博物館の新築工事が平成15年9月末に完工し、11月10日に竣工式を行いました。午前中の竣工式には、ご臨席を賜った100名を超す来賓や招待客、また、午後からは施設を一般公開して市内外から来館された260名の方々に、展示制作中の常設展示室を除き、学芸員室から収蔵庫に至るまで建物の全てを見ていただきました。木材をふんだんに使用した博物館は、4,200㎡の広さで従来の館の5倍以上もあります。中でも収蔵庫は特に人気で、博物館に対する興味・関心の高さを痛感しました。また 帰り際には 開館が待ち遠しいとみなさんが笑顔で館を後にされたこともありがたくまた、とても嬉しく思っています。

このように、見学会が大好評だったのは、開館1年前に施設見学を行ったことに加えて、きめの細かい対応ができたからだと自負しております。しかし、これはひとえに職員の数より多い35名の博物館ボランティアの方が、受付、下足の管理、各室の説明、見学者の誘導、場内整理、記録をする職員のサポート業務などに懇切・丁寧な対応をされ、こなしてくださったおかげです。市内だけでなく、隣町からも半日しかお手伝いできませんがと行って駆けつけてくださいました。最初は口々に「できるかな、大丈夫かな」とおっしゃっていましたが、午後になると職員よりも上手に解説されたり、工夫しながら受け持ち業務を消化されるなど、本当に頼もしいかぎりでした。また、見学会終了後に行った意見交換会では、「手洗い等のサインはもっと大きいほうが良い」、「ガラスが多く子供たちが怪我をしない配慮を」といった指摘があり、11月18日に車椅子2台を持ち込んで、



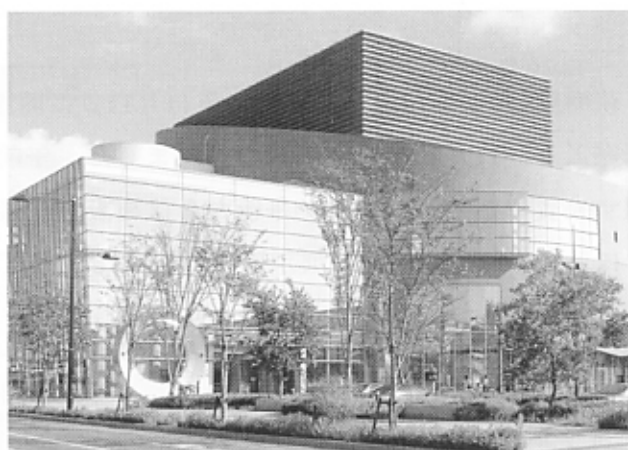
施設の点検を博物館ボランティアの皆さんと行うことに決定しました。

開館前から博物館と一緒に準備をするボランティアの存在、これは全国で萩だけなのではないでしょうか。このシャープな視線と暖かなおもてなしの心をもった博物館ボランティアと一緒にあれば、開かれた博物館、市民とともに歩む博物館を創ることができるかと確信した1日でした。

### 防府市地域交流センター（アスピラート）

平成15年4月に山口県博物館協会に入会させていただきました。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

簡単に当館をご紹介したいと思います。JR防府駅でんじんぐちより東へ徒歩約1分の所にある防府市地域交流センター（アスピラート）は、「防府市民の文化活動の発信基地として、また市民の文化活動の支援」を目的に1998年10月31日オープンし、今年開館6周年を迎えます。



鉄筋コンクリート造り地上6階建てで、1階はどなたでも自由に入出りができ、休憩の場・情報交換の場としての市民スペースがあります。また同じ1階の常設展示として、防府市出身で「野崎小唄、旅笠道中、明治一代女、同期の桜」などおよそ8千曲の作品を生んだ作曲家、「大村能章の部屋」があります。遺品30点とパネル展示、約千曲もの曲をヘッドホンで聴くことができます。同じく1階には、漂泊行乞の俳人と言われる「種田山頭火の部屋」があり、行乞足跡地図、防府市内の句碑の紹介、掛軸、日記、短冊等の展示に加え、俳句1万句を年代、キーワード、句集別にパソコンで検索できます。

2階には450㎡の広さの展示ホールがあり、絵画展、生花展、写真展、陶芸・工芸展などの各種展示会を中心に利用できます。その他2階にはミニコンサート、会議、研修会に利用できるリハーサル室。そして録音設備を備えた練習室が2部屋あり楽器、バンド等の練習場に最適です。

3、4階はステージ付きの602席収容可能な多目的ホールで、オーケストラ、合唱団、ピアノなどの演奏会、そして講演会、式典など各種イベントに利用できます。その他、防府市の名所、旧跡、行事、姉妹都市の広島県吉田町、アメリカモンロー市、大韓民国春川市などの紹介コーナーもあります。

以上、限られたスペースではなかなかご紹介しきれませんでしたので、是非一度時間をお取りいただきご来館くださいますようお願い申し上げます。

### 鑄錢司郷土館

鑄錢司郷土館は、国道2号線沿いの長沢池北岸の景勝地に昭和59年4月に開館しました。館の所在地である鑄錢司は、地名が示すとおり平安時代に貨幣を造る役所が置かれ、約200年間にわたり貨幣の鑄造が行われた所です。また、鑄錢司は明治維新に活躍した大村益次郎の出身地でもあります。



第一展示室には大村益次郎の関係資料を展示しています。宗太郎といった時代の出生から18歳で蘭学者「梅田幽齋」に入門するまでの関係資料の展示。漢学を豊後の「咸宜園」、洋学を大阪の「適塾」で学び、宇和島の藩主である伊達宗城に招かれて出仕し、名前を「村田藏六」と改名して、藩士に洋学を教えていました。その後、伊達宗城に従い江戸に出て、語



学の才能を見込まれ、幕府の「蕃所調所」や「講武所」で、多くの書物を翻訳することにより、多くの知識を得て、日本を代表する兵学者となっていく過程の関係資料を展示しています。益次郎の才能を惜しんだ、周布政之助や桂小五郎の働きで長州藩士となった関係資料。

世情騒然とする中で、山口の兵学寮で自ら翻訳した兵学書により、士官養成をした兵学関係資料。四境戦争関係で、石州口の指揮を執るときに書いた作戦図などを展示しています。

第二展示室には、平安時代の鑄錢司(現在の造幣局)が当地にあったことから、史跡周防鑄錢司跡からの出土品を展示するとともに、日本のお金の歴史が理解できるように、日本で使用された多くのコインの実物を展示し、貨幣の歴史が理解できるようにしています。

展示品には、奈良・平安時代に使用された、和同開珎をはじめとする「皇朝十二銭」、鎌倉・室町時代に宋や明から日本に入り、皇朝十二銭の後に通用した「渡来銭」、江戸時代使用された、一般によく知られている大判・小判・寛永通宝をはじめ、分金・丁銀・豆板銀・天保通宝等を展示しています。また、明治に近代貨幣制度が整備されて以後、大正・昭和時代に発行された金貨・銀貨をはじめ、銅・青銅・黄銅・白銅・アルミ・ニッケル・錫等多くの材料による貨幣や、東京オリンピック以来発行されている記念貨幣等を展示しています。

平成11～14年度重要遺跡確認緊急調査報告書  
「前田茶臼山遺跡」発掘調査報告書の刊行

山口県文化財保護課  
文化財専門員 石田 龍彦

山口県教育委員会では、県の歴史を知る上で重要な遺跡を開発等から保護するため、昭和48年から毎年、重要遺跡確認緊急調査を実施している。調査目的は、部分的な発掘調査や測量等により、遺跡の範囲や概要を把握し、保存活用のための基礎資料を得ようとするものである。平成11～14年度は、下関市の前田茶臼山遺跡の発掘調査を実施し、平成14年度には成果をまとめ、「前田茶臼山遺跡」発掘調査報告書として刊行した。

前田茶臼山遺跡（下関市前田1丁目所在）は、源氏と平家の激戦で著名な壇之浦の東約1kmあまり、眼下に周防灘を見下ろす高台に立地する。遺跡は、古代の長門国分寺系瓦が出土することで知られている。幕末期には、長州藩の主力砲台の一つ前田砲台（高台場、低台場の2基から成る）が設置され、奇兵隊が配備された。砲台は、下関戦争末期の1864年、英米仏蘭四国連合軍の攻撃をうけて占領され、この際撮影された写真は、多くの歴史教科書にも掲載されている。

報告書では、県内初となる幕末期砲台跡の発掘調査成果を中心に、発見された遺構や遺物の写真や図面をできる限り掲載し解説した。中でも、高台場跡の焼土に覆われた土塁や低台場跡背後で発見された連合軍の艦載砲から砲撃をうけたとみられる砲弾は、激しい戦闘を物語る資料として注目される。また、関連資料として、占領当時撮影された写真やイギリスのイラスト入り新聞記事の写真、下関戦争で使用された両軍の砲弾や長州軍の大砲模型の写真、代表的な文献史料の一部を掲載した。

報告書のまとめでは、近年紹介されたイギリス軍が占領時に測量した前田砲台実測図を所収し、発掘調査成果との照合を行い、成果図を掲載した。照合結果から、イギリスの測量技術の高さが追認された。古代関係では、出土した軒丸瓦・軒平瓦の型式分類案を提示した。

発掘調査で発見された前田砲台の遺構は、残された占領当時の写真やイギリス軍実測図、文献史料と結びつけることにより、当時の事件をより具体的に知る貴重な手がかりとなる。前田砲台の盛衰は明治維新胎動期の象徴的な一場面であり、遺跡が郷土の貴重な歴史遺産として将来にわたって継承され、身近な歴史教材として活用されることが強く望まれる。

（本報告書は山口県文化財愛護協会から販売中、A4判92頁 付図あり。 頒価1,500円、送料別途）



前田砲台高台場跡の焼土に覆われた土塁

## 第21回国民文化祭・やまぐち2006の開催に向けて

山口県文化振興課国民文化祭準備室

国民文化祭は、全国各地で行われている文化活動を全国的な規模で発表し、交流する我が国最大の文化の祭典です。山口県では、平成18年11月3日から12日までの10日間、「やまぐち発 心ときめく文化維新」のテーマで開催しますが、その開催に向けて準備が本格化しました。

平成15年9月19日、二井山口県知事を会長とする第21回国民文化祭山口県実行委員会が設立されました。

実行委員会には、県内の市町村や関係団体の代表者約200名の方々に参画をいただき、催しごとの具体的な計画の作成をはじめ、県民からの企画提案型の事業の募集や、ボランティア組織等との連携を行い、山口県らしい特色のある国民文化祭の開催準備を進めています。



平成18年に実施する分野別フェスティバルの開催市町村がほぼ決定し、今後、各関係市町村において実行委員会が設立され、それぞれの具体的な事業内容等について検討が進められていく予定となっています。

下関市	演劇祭（ミュージカル）、民俗芸能の祭典（和太鼓フェスティバル）、美術展（工芸）、社交ダンスフェスティバル、大茶会、食の祭典	柳井市	大正琴の祭典、華道展
宇部市	文芸祭（随筆）、邦楽の祭典、彫刻展	周南市	吹奏楽の祭典（コンサート、マーチングバンド・パトントワリング）、民俗芸能の祭典（神楽フェスティバル）、美術展（写真）、洋舞フェスティバル（クラシックバレエ・モダンダンス）
山口市	シンポジウム、演劇祭（現代劇）、全国吟詠剣詩舞道祭、文芸祭（詩）、美術展（日本画、洋画）、日本舞踊祭、街なか生活文化祭、ファッションショー、メディア芸術祭	大島郡4町	アイランドフェスティバル
萩市	シンポジウム、民謡・民舞の祭典、文芸祭（川柳）、美術展（陶芸）	玖珂町	出版文化展
防府市	文芸祭（自由律俳句）、大茶会	徳地町	里山文化祭
下松市	童謡フェスティバル	小郡町	文芸祭（俳句）
岩国市	合唱の祭典、文芸祭（短歌）、橋の祭典、街なか生活文化祭	楠町	美術展（書）
小野田市	ガラス工芸展	山陽町	洋舞フェスティバル（ジャズダンス）、少年少女合唱祭
光市	演劇祭（人形劇）	菊川町	生活美術展
長門市	民俗芸能の祭典（能楽・狂言フェスティバル）、地芝居の祭典、みすゞ童謡詩祭	美東町	シンポジウム
		秋芳町	ミュージックフェスティバル
		油谷町	棚田フェスティバル
		田万川町	洋舞フェスティバル（フラメンコ）
		阿東町	東アジア文化の祭典

※開会式、閉会式等総合フェスティバルと一部の分野別フェスティバルの開催地は、平成16年3月に決定する予定です。

〈問い合わせ先〉山口県文化振興課国民文化祭準備室  
TEL 083-933-2850 FAX 083-933-4829

山口県博物館協会加盟館一覧（平成16年1月現在）

	館名	住所	〒	電話番号
東 部 地 区	1 陸奥記念館	東和町 伊保田	742-2601	0820-75-0042
	2 橋町民俗資料館	橋町 東安下庄701-1	742-2805	0820-77-2265
	3 久賀町歴史民俗資料館	久賀町 久賀	742-2301	0820-72-1875
	4 日本ハワイ移民資料館	大島町 久屋代2144	742-2103	0820-74-4082
	5 岩国徴古館	岩国市 横山2-7-19	741-0081	0827-41-0452
	6 岩国歴史美術館	岩国市 横山2-10-27	741-0081	0827-41-0506
	7 吉川史料館	岩国市 横山2-7-3	741-0081	0827-41-1010
	8 和木町歴史資料館	和木町 瀬田260	740-0062	0827-52-3751
	9 美和町歴史民俗資料館	美和町 洪前1846	740-1225	0827-96-0122
	10 本郷村歴史民俗資料館	本郷村 本郷1526	740-0602	0827-75-2122
	11 由宇町歴史民俗資料館	由宇町 神東614-10	740-1432	0827-63-1515
	12 月性展示館	大島町 遠崎	749-0103	0820-45-2226
	13 商家博物館ひろやの園	柳井市 柳井津439	742-0022	0820-22-0016
	14 平生町歴史民俗資料館	平生町 平生	742-1101	0820-56-2310
	15 田布施町郷土館	田布施町 下田布施875-6	742-1511	0820-52-2620
	16 伊藤公資料館	大和町 東荷2250-1	743-0105	0820-48-1623
	17 石城の里 三国志城	大和町 塩田	743-0101	0820-48-4600
中 部 地 区	18 光市文化センター	光市 光井9-18-2	743-0011	0833-72-5800
	19 周南市徳山動物園	周南市 大字徳山5846	745-0874	0834-22-8640
	20 周南市美術博物館	周南市 花島町10-16	745-0006	0834-22-8880
	21 毛利博物館	防府市 多々良1-15-1	747-0023	0835-22-0001
	22 防府天満宮歴史館	防府市 松崎町14-1	747-0029	0835-23-6172
	23 阿弥陀寺文化財収蔵庫	防府市 牟礼1869	747-0004	0835-38-0839
	24 防府市青少年科学館	防府市 寿町6-41	745-0809	0835-26-5050
	25 防府市地域交流センター	防府市 戎町1-1-28	747-0036	0835-26-5151
	26 福田貝館	徳地町 島地288	747-0522	0835-54-0011
	27 山口県立山口博物館	山口市 春日町8-2	753-0073	083-922-0294
	28 山口県立美術館	山口市 亀山町3-1	753-0089	083-925-7788
	29 山口市歴史民俗資料館	山口市 春日町5-1	753-0073	083-924-7001
	30 中原中也記念館	山口市 湯田温泉1-11-21	753-0056	083-932-6430
	31 のむら美術館	山口市 湯の上山町5-27	753-0082	083-928-0995
	32 瑠璃光寺資料館	山口市 香山町7-1	753-0081	083-924-9139
	33 龍福寺資料館	山口市 大殿大路119	753-0093	083-922-1009
	34 おおすみ歴史美術館	山口市 湯田温泉3-1-26	753-0056	083-932-8862
	35 鑄銭司郷土館	山口市 大字鑄銭司1422	747-1221	083-986-2368
	36 小郡町文化資料館	小郡町 下郷609-3	754-0002	083-973-7071
	37 宇部図書館附設資料館	宇部市 島1-4-55	755-0067	0836-21-4510
	38 宇部市石炭記念館	宇部市 沖宇部北本町土手117	755-0001	0836-31-5281
	39 宇部市野外彫刻美術館	宇部市 常磐町1-7-1	755-8601	0836-34-8616
	40 遺雲堂美術館	宇部市 新天町2-8-1	755-0029	0836-21-2203
	41 小野田市歴史民俗資料館	小野田市 栄町9-21	756-0802	0836-83-5600
42 美祿市歴史民俗資料館	美祿市 大嶺町前川通	759-2292	0837-53-0189	
43 秋吉台科学博物館	秋吉町 秋吉	754-0511	0837-62-0640	
西 部 地 区	44 東行記念館	下関市 吉田町1184	750-1101	0832-84-0211
	45 下関市立長府博物館	下関市 長府川端1-2-5	752-0979	0832-45-0555
	46 忌宮神社宝物館	下関市 長府宮の内1-8	752-0967	0832-45-1093
	47 乃木神社宝物館	下関市 長府宮の内3-8	752-0967	0832-45-0252
	48 下関市立美術館	下関市 黒門東町1-1	752-0986	0832-45-4131
	49 下関市立しものせき水族館	下関市 あるかぼーと6-1	750-0036	0832-28-1100
	50 下関市立考古博物館	下関市 綾羅木 岡454	751-0866	0832-54-3061
	51 住吉神社宝物館	下関市 一の宮住吉1-11-1	751-0805	0832-56-2656
	52 赤間神宮宝物殿	下関市 阿弥陀寺町4-1	750-0003	0832-31-4138
	53 藤原義江記念館	下関市 阿弥陀寺町3-14	750-0003	0832-34-4015
	54 中山神社宝物殿	下関市 綾羅木本町7-10-8	751-0849	0832-53-0704
	55 梅光学院大学博物館	下関市 向洋町1-1-1	750-8511	0832-27-1070
	56 豊田町文化財資料館	豊田町 矢田153-1	750-0424	0837-66-3479
	57 豊浦町鳥山民族資料館	豊浦町 川棚湯町5281	759-6301	0837-72-1052
	58 土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム	豊北町 神田上	759-6121	0837-88-1841
	59 豊北町歴史民俗資料館	豊北町 瀧部3153-1	759-5511	0837-82-1661
	北 部 地 区	60 八幡人丸神社古典樹苑	油谷町 新別名35	759-4503
61 日置町歴史民俗資料館		日置町 古市上（社教課）	759-4401	0837-37-2340
62 三隅町立村田清風記念館		三隅町 三隅下2510-1	759-3803	0837-43-2818
63 三隅町立香月美術館		三隅町 湯免	759-3802	0837-43-2500
64 萩市郷土博物館		萩市 江向552-11	758-0041	0838-25-6447
65 熊谷美術館		萩市 今魚店町47	758-0052	0838-25-5535
66 萩史料館		萩市 堀内83-33	758-0057	0838-25-2132
67 石井茶碗美術館		萩市 古萩町33-3	758-0077	0838-22-1211
68 菊屋家住宅保存会		萩市 呉服町1-1	758-0072	0838-25-8282
69 血闘萩美術館・浦上診館		萩市 平安古586-1	758-0074	0838-24-2400
70 阿武川歴史民俗資料館		川上村2319	758-0100	0838-54-2024
71 須佐町歴史民俗資料館		須佐町 須佐	759-3411	08387-6-3916

今日、ボランティアへの関心が高まっていますが、文化ボランティア、特に博物館ボランティアへの取組みは、まだ後れているようです。山口県博物館協会では、文化庁の支援を受け、県内各博物館等のボランティア受入れがスムーズに行われるよう、今回お示したような取組みを行いました。これが起爆剤となって、博物館ボランティアの活動が盛んになることを心から祈っています。

文化振興課国民文化祭準備室の今回の案内が示すように、2006年には文化の祭典「第21回国民文化祭」が本県各地を会場にして開催されます。歌、踊り、民俗芸能、美術展等多彩な催しが予定されていますが、博物館は各地の自然、文化、歴史などに関する貴重な資料を収集・保管・展示しています。博物館も加わって、キャッチフレーズの「やまぐち発 心ときめく文化維新」を実現させたいものです。

そのためには、県内各文化施設へのボランティアの方々の積極的な参加が不可欠です。山口県博物館協会では、博物館ボランティア登録制度を設け、各志願者に最もよい形での活動ができるよう様々な支援を行っております。詳細は、下記の山口県博物館協会のホームページをご覧ください。

(文責 宗清)

山口県博物館協会ホームページ URL <http://www.da.rsl.on.tiki.ne.jp/>

---

**山口県博物館協会会報第28号**

発行日 平成16年1月21日

編集・発行 山口県博物館協会事務局  
〒753-0073 山口市春日町8-2  
山口県立山口博物館内  
Tel 083-922-0294  
Fax 083-922-0353

印刷 株式会社大一写真工業  
山口市湯田温泉6丁目8-57  
Tel 083-923-3010  
Fax 083-923-5356

---